

## [26] Crossover : 新キャンパスガイド

<https://doi.org/10.15017/19362>

---

出版情報 : Crossover. 26, pp.1-43, 2009-07. 九州大学大学院比較社会文化学府  
バージョン :  
権利関係 :

# CROSSOVER

No.26 July, 2009

特集：新キャンパスガイド



九州大学大学院  
比較社会文化学府

# Contents

## 巻頭言

平成21年度 比文入学式挨拶	田中 良之	1
----------------	-------	---

## 新任教員紹介

日本語学習者の頭の中を探検しています！	小森 和子	2
伊都にドイツの風が吹く	福元 圭太	3
南極からみた地球の進化	外田 智千	4

## 自著を語る

「泰平」と規範—拙著『近世領土支配と地域社会』をめぐって	高野 信治	5
『近代日本の陶磁器業』	宮地 英敏	7

## 比文叢書の反響

書評／三隅一人著『A FORMAL THEORY OF ROLES』	小杉 考司	9
書評リプライ	三隅 一人	10

## 特集：新キャンパスガイド

新キャンパス施設の特徴—センターゾーン保全係長・崎村利一さんにきく		12
生物多様性ゾーン—里山の自然とふれよう	矢田 脩	14
かつて、そこでは：伊都キャンパス・センターゾーンとその周辺の遺跡	溝口 孝司	16
比文の実習室・実験室等一覧		19

## 社会人コーナー

博士後期課程に編入学して	田村 美香	21
--------------	-------	----

## 国内レポート

国際生命倫理ディベート大会に参加して	木下 博公	22
--------------------	-------	----

## 海外レポート

“台湾の魯迅”頼和の文学に導かれて—国立彰化師範大学滞在記	秋吉 收	24
-------------------------------	------	----

## 新しい出発

明星大学に就職して	趙 海城	27
九州産業大学の専任講師となって	吉原 弘道	29

## 博士論文を書き終えて

博士論文を書き終えて	網野 薫菊	30
学位論文を書き終えて—インドネシア・カリマンタンのサンゴ礁を守るために—	ハンドコ・アディ・スサント	32

## 学府長祝辞

平成20年度比文学位記授与式挨拶	田中 良之	34
------------------	-------	----

大学院データブック		35
-----------	--	----

編集後記		43
------	--	----

## 表紙の説明

比較社会文化学府の研究・教育のキーワードは、「異なる社会と異なる文化」、「グローバリゼーション」、「地球環境」です。表紙のデザインは、諸問題が地球規模で進行する現代社会を学際的なアプローチで研究している本学府の姿勢を象徴しています。「異なる社会と異なる文化」を繋ぐ言葉をロゼッタストーンで、「グローバリゼーション」を大陸間を渡るカモで、「地球環境」をジグソーパズルの衛星画像で表しています。

表紙デザイン：独立行政法人 国立科学博物館・非常勤研究員 林 辰弥

# 平成21年度 比文入学式挨拶

田中 良之

(比較社会文化学府長)

平成21年度九州大学大学院比較社会文化学府の入学式に臨み、学府長としてご挨拶申し上げます。

本年度の入学者は、修士課程が日本社会文化専攻32名、国際社会文化専攻18名の計50名。博士課程は、日本社会文化専攻21名、国際社会文化専攻12名の計33名。以上合わせて83名の新生を迎えることになりました。まずは、この83名の皆さんに、入学および進学のお祝いを申し上げます。おめでとうございます。

皆さんをお迎えして、本学府は、修士課程110名、博士課程147名、合計257名の大学院生を擁し、76名の教員に大学院係をはじめとする事務職員によって、本年度の研究教育を開始することとなります。

さて、本日入学された83名のうち、修士課程には25名の留学生、4名の社会人が含まれており、博士課程では留学生は17名、社会人は5名を数えます。さらに、国籍は日本はもちろんですが中国、韓国など8カ国、出身大学は12校に上ります。これが私たち比較社会文化学府の大きな特長なのです。

本学府は平成6年に学際性・国際性・総合性をキーワードとする比較社会文化研究科として発足しました。学部をもたない独立大学院ですが、私たちは九州大学における二つめの独立大学院として発足したわけです。その後、九州大学では研究組織と教育組織を分離して、教員の組織を研究院、教育組織を学府としました。皆さん方は、教育組織である比較社会文化学府に所属しているわけです。

さて、私たち比文は六本松キャンパスに設置されました。周囲には多数の飲食店があり、交通至便な都市型キャンパスでしたが、一方では施設が分散し狭隘であるなど、大学院の施設としては不十分としかいいようのないものでした。そして、今年度からはこの伊都キャンパスに移転して研究教育を開始することになったわけです。皆さん方は、伊都キャンパス1年生となります。

移転によって、比文言文棟にまとまり、比文の施設面での問題はだいぶ解消されたと思いますが、まだ移転直後の混乱の中にあります。皆さん方は、この伊都の地において、知的空間として比文の空間の再構築、いや新たな創造に、私たち教員と共にあたっていただきたいと思います。

さて、比文は一般的には学際大学院として認知されています。「学際」とは設置当時のある意味流行りの言葉だったのですが、もとより「学際学」というものはありません。一つの学問領域の方法と理論を習得して、それを基盤としながらさらに学問の境界を越えて、他分野の方法を取り込み、あるいは融合させながら行うのが学際研究です。

皆さんは、人文学から自然科学まで、それぞれが目指す研究領域は異なっているでしょうが、無理に「学際」にしたり、木に竹を接ぐようなことをする必要はまったくありません。しかし、新たな研究地平を切り開くことを目指すのならば、これまで新しい学問、研究法が異質なものがぶつかり融合する中で出てきたことを想起して、ほんの少しでもいいですから越境を試みて欲しいと思います。学問分野は細分に細分を繰り返し、現在2,000を超える分野があるということですが、これらは統合・融合の時期に来ていると思います。しかし、これらが伝統的な分野に収斂していくかたちで統合・融合が進むわけではなく、新領域としてまとまっていくことは疑いありません。そういった中で、異分野の学生同士がともに学び、語り、少しずつ越境して、それを総合するというベクトルを共有していることに、比文で学ぶ大きな意味があると思います。

こんにち、百年に一度という経済状況の中、社会不安を増大させるようなニュースが飛び交っています。また、大学や学問に対する社会の評価も、かつてとは比べようもない状況です。しかし、そのような時であるからこそ、皆さん方には未来を見据え、しっかりと研究を展開し、ひいては新たな研究領域を開拓していただきたいと思います。そのために、私たち比文の教職員、あるいは九州大学の教職員たちがいるのですから、おおいに活用していただきたいと思います。

入学されたばかりの皆さん方は、今現在溢れるばかりの情熱や夢をもっておられると思います。これから比文でその夢が実現するよう研鑽を積み、満足できる成果をもって学界、社会へと巣立たれる日を迎えられることを期待して、本日比較社会文化学府での生活を始められた皆さんへの歓迎の言葉といたします。

平成21年4月9日

# 日本語学習者の頭の中を探検しています！

小森 和子

(日本語教育講座)

私は、平成20年9月16日付けで、留学生センターに着任し、平成21年4月からは、本学府の日本語教育講座にも関わらせていただいております。今回は自己紹介として、私に取り組んだ研究の一部を簡単にご紹介します。

私は、二つの言語を併用するバイリンガル話者（特に、中国人日本語学習者）の心内辞書（人間の頭の中にあると想定される記憶システムで、語の書字、音韻、意味等の情報の貯蔵庫）の構造とその心内辞書へのアクセス過程の観察を通して、第二言語における語彙習得について考えています。

私が特に興味を持っているのは、日本語にも中国語にも存在する“同形語”（『緊張』と『紧张』、『暗算』と『暗算』など。「」は日本語、『』は中国語です）を、中国人日本語学習者が頭の中でどのように認知し、処理しているのか、ということです。中国人日本語学習者が日本語の学習や習得において有利と言われる理由の一つに、この同形語の存在が挙げられます。確かに、同形語は、日本語と中国語で意味が全く同じであるものが多いのですが、中には、日本語と中国語で意味や用法にズレがあるため、中国語の知識をそのまま転用すると、誤用が起こる場合があります。

例えば、日本語の「緊張」と中国語の『紧张』には、< tense >という共有義がありますが（意味は英語で示し、< >を付します）、中国語には< busy >という独自義もあります。ですから、中国語では『工作很紧张』と言うのですが、これを日本語に逐語的に置き換えた「\*仕事が緊張している」は非文になってしまいます。また、「暗算」と『暗算』の場合は、共有義が無く、二言語で意味が異なります。中国語の『暗算』は< conspiracy >を意味し、日本語のような< mental arithmetic >という意味はありません。なお、日本語の「暗算」に相当する中国語は『心算』です。

では、中国人日本語学習者がこのような同形語を日本語で目にした時、頭の中でどのようなことが起こっているのでしょうか。書字、単語頻度、親近性等によって異なりますが、人間が単語を認知する速度は約100~200ms程度で、その間に心内辞書にアクセスし、意味や音韻に関する情報を取り出しています。では、この短い時間の中で、中国人学習者はどのように同形語を認知しているのでしょうか。

私は次のような実験をしてみました。中国語義で解釈すると文意が通るが、日本語としては非文になるような文、

例えば、「\*仕事が緊張している」をコンピューターのモニターに呈示し、中国人学習者の非文性判断を、反応時間の計測によって検討しました。反応時間パラダイムの実験は人間の無意識レベルの言語処理過程を検討するもので、心理言語学や認知心理学の分野では古くから用いられています。

実験の結果、日本語習熟度が高い学習者でも、こうした文を“間違った日本語である”と判断するまでに長い時間がかかりました（統制条件との比較）。これは、頭の中で中国語義が活性化し、それが抑制効果となって、正誤判断に時間を要したからだと考えられます。つまり、中国人日本語学習者は単語認知処理過程では、日本語の心内辞書ではなく、中国語の心内辞書にアクセスしていることが示唆されるのです。しかし、この学習者らは、筆記テストでは「\*仕事が緊張している」は誤用文、「スピーチの前は緊張する」は正用文、と正しく判定できるのです。筆記テストというのは、単語認知処理の後に起こる意識的な言語運用により解決される課題です。よって、以上を総合すると、中国人学習者は日本語習熟度が高くなっても、日本語の認知処理の段階では日本語の心内辞書ではなく、中国語の心内辞書にアクセスしているということ、そして、言語を運用する段階になって始めて、日本語の心内辞書にアクセスしている、と推測されます。

このように、2つの心内辞書を持つ話者の頭の中では、複雑な処理が起こっているのです。私はこれからも日本語学習者の頭の中で何が起きているかを探ることを通じて、人間の言語処理について考えていきたいと思っています。



阿蘇ミルクロードにて

# 伊都にドイツの風が吹く

福元 圭太

(国際言語文化講座)

生まれ育った大阪を28歳で離れ、博多に赴任してはや21年。普段は習い覚えた博多弁を使っていますが、関西人と話すときと照れくさい時は、脳の古皮質に染みついた大阪弁が出ます。大阪外国語大学ドイツ語学科に修士課程まで通いました。当時外大は大阪一の寒冷地といわれる箕面の山奥に移転したばかりで、キャンパスは坂また坂。メインの階段は白っぽい花崗岩製で、学生たちからは「墓石階段」と呼ばれていました。ここ伊都キャンパスで毎日デジャ・ビュに襲われています。「外大そっくり」。修士課程修了後すぐに旧東独、東ベルリンのフンボルト大学に留学しました。まだ「壁」があったころです。ドイツ文学科の建物は今ではベルリン観光のメッカである「ペルガモン博物館」の真向かいという立地の良さでしたが、巨大な博物館の集中する「博物館島」には当時まだ戦禍の瓦礫が散乱し、ドイツ文学科の建物にも弾痕が残っているという有様でした。母校外大はこのたび大阪大学に吸収されました。東独は西独に併呑されました。そして六本松ともさようならです。「花に嵐のたとえもある」とはいえ、過去を抹消しながら生きていくような気もします。

中学時代にモーツアルトやバッハに心酔し、ドイツ音楽を聴きながらゲーテやハイネ、ヘッセやリルケやトーマス・マンの翻訳を読んでいました。いつかはドイツ語で読みたい、ドイツに行きたい、ライン川の支流でマス釣りをしたいという夢がありました。紆余曲折はあったものの虚仮の一念、その夢の大半は叶いました。後年たしなむようになったビールやワインを含めて、ドイツ全般に愛着があります。文法が複雑だ、子音がきつい、といった悪口も聞こえるドイツ語も、私には「こよなく美しい言語」。学生たちにドイツ語を教えるのが楽しくてなりません。病昂じて独和辞典の編纂にまで参画。もう18年目になりました。

東独以外のドイツ長期滞在は2回、ボン大学とミュンヘン大学です。ミュンヘン大学では「日本センター」で日本語を教える経験をさせていただきました。「日本センター」の主任教授が、なんと母校の外大で初めてドイツ語を教わった当時の外国人教師だったという奇しき縁、20数年ぶりの再会でした。日本語教育ご専門の先生方には申し訳ないけれど、付け焼刃で勉強をして2学期間日本語の授業を行い

ました。日本語を使って英語を教えておられる英語ネイティブの先生方がたくさんおられるので、あまり不思議なこととは思わなかったのですが、母語を外国語で教える、私の場合ドイツ語で日本語を教えてみると、その倒錯感に目くるめく思いがしました。

主たる研究対象は修士のころから一貫してトーマス・マン。作品そのものというよりは同時代の社会・政治・思想とマン文学のかかわりに重点をおき研究を進めてきました。2003年に博士論文を提出。そこでは「政治と文学」というありがたいテーマにもう一本「エロス」(マンの場合同性愛)という補助線を引き、「エロスと政治と文学」の特殊ドイツ的あり方をマンという媒質を通して明らかにしようと試みました。2005年によく本として上梓することができました。校正しながら誰がこんな本を読むのだろうと思っていた拙著でしたが、望外にも「日本独文学会賞(日本語著書部門)」を受賞、地道というよりは亀の歩みのような研究を評価していただき、心の中で控え目にガッツポーズをしました。

現在は一元論的思想や心身問題に興味があり、生物学者のヘッケルや精神物理学者のフェヒナーらを対象に、ドイツ語圏モデルネの自然科学に伏流する神秘主義的思考の系譜を辿りつつあります。

比文では優秀な同僚・先輩の皆さんから刺激をいただきながら、学生さんとともに学べることを楽しみにしております。どうぞよろしく願いいたします。



ミュンヘン大学「日本センター」主任教授のペルトナー先生と。当時学生たちからは「ペーちゃん」と呼ばれていた。

## 南極からみた地球の進化

外 田 智 千

(極域地圏環境講座)

この4月から客員教員として極域地圏環境講座を担当することになりました。どうぞよろしくお願いいたします。私の所属する国立極地研究所は、南極や北極あるいは山岳高所といった地球上のいわゆる「極地」に関する総合研究と観測をおこなう研究機関です。また、日本の南極観測を実施運営する中核機関という役割を担っています。



昨年退役した砕氷艦「(初代)しらせ」と南極の太古代の山塊

さて、私の専門分野は地質学です。これまで、南極をはじめとしてアフリカや南アジア、その他国内外の様々な地域をターゲットとして、野外地質調査と持ち帰った岩石試料の解析によって、地殻深部に由来する岩石の成因や被った物理条件、また熱による岩石の化学変化や岩石の融解作用など、地球が誕生してから現在に至る地殻のダイナミクスを理解することを目標に研究をおこなってきました。

私の主要な研究対象のひとつである南極は、今から約5-6億年前に超大陸「 Gondwana 」の形成と時をほぼ同じくしてできた大陸です。地球上ではこれまでに何度も大陸が離散集合して時に巨大な“超大陸”を形作っていたことが知られています。その中で現在から直接たどれる、ある意味唯一実証可能なものが「 Gondwana 」超大陸であり、その成因の鍵を握るのが南極大陸なのです。

南極大陸にはまた、今から25億年以上前の“太古代”と呼ばれる古い地質時代の岩石が広く分布します。その中でも特に古い岩石は約38-40億年前の地球最古に匹敵するものです。今から12年前にちょうどわたしが博士課程の大学院生として2度目の南極調査に加わった際に、地域資料情報講座の小山内康人教授とともに約2ヶ月にもおよぶ南極でのこの太古代の地質の調査を一緒におこなう機会があり

ました。それ以来、小山内教授からは様々な面で指導を受けました議論をおこないつつ共同研究をすすめてきています。

そしてつい最近では、一昨年(2007-2008年)に再び小山内教授と、また同じく比較社会文化学府の地球自然環境講座に所属する中野伸彦助教とともに南極セールロンダーネ山地と一緒に地質調査をおこなう機会を得ました。基地から約600km離れた南極内陸の孤立した山塊で約2ヶ月半の間、無支援・無補給で野外調査をおこない、現地データや持ち帰った岩石試料の解析によって Gondwana 超大陸の形成機構に関する重要な新知見を得つつあります。

こうした国内外の共同研究を通じて地球の進化の記録を紐解いていきたいと考えています。今から約2億年後には北米やオーストラリアが日本を含む東アジアに衝突して地球上に再び巨大な大陸塊を形成することが予測されています。過去は未来への鏡であり、地球の将来予測を含めてフィールドサイエンスから地球科学に貢献していければと思います。

私にとって、地質学のこうした歴史科学の側面に加えて、もう一つ大きな興味は、地殻の内部でおきている物理・化学現象の理解です。我々人間の時間スケールでは想像の困難な、数万年～数億年という時間スケールで強固で不動に見える岩石が流動変形し化学変化をおこしています。そうした過程は、我々人類が生きる地球という惑星の成り立ちを知るというだけでなく、自然科学の普遍原理の理解という意味で非常に重要だと考えています。

今後も、「地球46億年の進化史の解明」と「地殻内部での物理・化学プロセスの解明」という2つの大きな柱のもとで研究をすすめてきたいと思います。



南極セールロンダーネ山地にて

# 「泰平」と規範—拙著『近世領主支配と地域社会』をめぐる—

高野 信治

(地域構造講座)

編集者から「自著を語る」の原稿依頼を受けたとき、「語るべき本など書いていない」と申し上げた。史料の収集と解釈の繰り返しという細かい議論の上で展開する内容は、学際性を売りにする比較社会文化学府をアピールする上で、どれほどの効果があるのか甚だあやしいし、比文に関わる皆さんにとっても、退屈なうっとうしさを感じさせるだろうことは、何となく想像できる。ただ、本書執筆のこだわりはあるつもりだ。それは私自身の子供に対する思いであり、その一端は『比文創立十周年記念文集』（2004年）に『「共生」についての雑感』として書いている。その思いの上に本書は構想された。

江戸時代は前後の時代とは異質な容貌をもつ。約百年にわたる戦国争乱やその終末期の朝鮮出兵のあとが、江戸時代の幕開けで二百数十年続いた。当時の人たちは「天下泰平」と称した。その表現は戦国争乱を「乱世」と意識すれば的確であろう。そして、長州戦争や戊辰戦争・士族反乱などの内乱に始まる近代が、百数十年の間に日清・日露戦争から十五年戦争と、戦争を繰り返したのを考えあわせれば、その「泰平」の異質性がより際だつ。もちろん、戦国期と近代の内乱・戦争は、対外的契機のあり方も関係し同質ではないが、江戸時代の「泰平」認識とは様相を異にする点では共通する。ところが、「泰平」と捉えられた江戸時代の政治社会の枠組みを作り、行政支配を担ったのは、戦闘者としての性格を持つ武士たちであった。日本史のなかでも稀に長く続いた「泰平」を実現したのが、武人としての武家政権（徳川幕藩体制）であったのは、歴史の皮肉でもあろうが、この「泰平」を「徳川の平和」と称する人もいる。そして、現代人は、ちょうど「昭和」（とくに戦後の）を懐かしむように、江戸時代を例えば「エコの時代」「江戸の幻想」などと、もてはやしているようにもみえる。

戦後歴史学では、唯物史観を主要な方法論に据え、江戸時代は「百姓と油は絞れば絞るほどとれる」という言説に象徴されるように、過酷な生活を強いられる民という、「悪しき封建制」の時代（武士と地主・商人からの二重の搾取）とみられ、それへ抵抗する民（百姓一揆・都市打ち壊しなど）が外圧の影響も相まって、封建制を打倒し近代を生み出した、例えば、かかる図式で描かれた。「徳川の平和」のよう

に「泰平」という時代性に重要な意味を見出すのは、「悪しき封建制」という見方とは別の位相として江戸時代をみる立場といえよう。近年では、「民間社会」、つまり様々な生業を営む人々が集団化し自分たちの権益を主張するような社会が形成された時代、という見方も提示される。要するに虐げられた民ではなく活力ある民、そのような評価で、元禄文化・化政文化などと総称される庶民文化が江戸時代に生まれるのも、生業にいそしみ致富を実現、生活を楽しむゆとりをもてるようになった民の活力があつてこそ、となる。敢えて表現すれば、『武士が築いた「泰平」を謳歌するにいたる民の力が開花した江戸時代』そのようなイメージだ。

私は、民の力を信頼しそれに歴史を動かすエネルギーをみる立場に、竿をさすつもりはないし、最近では語られなくなった唯物史観の歴史認識にも通底する、ある意味での斬新さを感じる。しかし、私は江戸時代をめぐる、規範を基軸に人を差別する発想が格段に強まった時代とも考える。規範には、権威や道徳、そのようなものが想定できよう。

江戸時代の治者である武士は、本来は戦闘者である。すでに戦国期、自分の領国は大名や家臣、村役人や百姓など様々な人々から構成されており、とくに百姓の困窮は他国（ほかの領国・大名）との合戦の勝利には大きな支障をきたすと考えられていた。合戦の兵糧やそれらをはじめとする必要物資は百姓が生産し運搬にあたらなければならなかったためである。戦国争乱の時代であっても、領主（大名）は自領国の民の疲弊を、合戦を想定して恐れたわけで、暴力を背景とする強制的な取り立ては控える民政観が形成された。このような考え方は戦国争乱が収束したのちにも継承される。豊臣秀吉は百姓の後生のための大仏建立と称して武器を没収（刀狩り）したが、それは民の生活の保証を約束する意味合いもあつた。民政にあたる役人を「牧民」とし、彼らが「民を牧（やし）なう」という、中国（元末期）で生まれた思想は、朝鮮経由で江戸期の日本にも伝わり、民の生活を重視する民政が一つの理想とされた。しかし、ここでいう民とは、年貢・諸役、今で言えば税を納めている人々である。税（江戸時代の年貢が公共性がある税か私性格が強い地代かの議論は措く）を納める民が牧なわれ、領主



## ○○○ 自著を語る

の「御救」(救済)の対象ともなる。地域社会(村や町など生活が成り立つ場、とここでは考えておこう)は行政支配の単位(本来、地縁共同体という性格が強い村は江戸期には税を負担する単位としての行政村になった)となり、税を負担できない、あるいは負担しようとしなない者は「村の衆」に迷惑をかけることになる。税は個人単位ではなく、村(地域社会としての行政村)単位にかかるのであり、税負担の意志や能力は地域社会のなかでの個人評価にもつながる。

逆に勤勉に働き税を負担する篤農家は、領主から注目され、民の模範とされるようになった。江戸時代、民の顕彰を領主側は盛んに行うが、そのなかにはこのような篤農家も多くを占める。彼らがなぜ篤農なのかといえば、勤勉・正直・質素・孝行などの徳目を持っているからと評される。そのような徳目は村役人から民への教諭が期待されるが、このような領主側が期待する人間像の教諭の実践に、顕彰・褒賞される篤農家のような人物が動員される。そして、彼らは納税のみならず領主へ献金なども行い、武士身分を買得するものもあった。ここには、民が持つ武士身分への憧憬がある。身分上昇、身上がりとして、能動的・主体的に生きる動機付けといえるのかもしれないが、武士身分が持つ一種の権威性に誘引される民の姿をみることもできよう。勤勉・正直・質素に暮らし孝行しながら富を蓄え、献金もして武家領主に認めてもらい、役人として人々に教諭する。教諭のベクトルは上述のような家職に励むことであり、これが家相続の基本とされた。

このような、生活と道徳と権威が結びつきたいわば社会装置としての規範意識は、江戸期を通して定着していったと思われる「日本人」像と結びつけられ、比喩的にいえば江戸時代の人々を覆い包んでいった。江戸時代の治者としての武士層は、民の身分上昇意識、これは生きる活力でもあるわけだが、権威を軸にコントロールしながら、社会秩序の維持を図った。まじめに仕事し生きた証として金で身分を買ひ、武士的な権威を持ったものとして地域社会の中でのステータス、文字通りの名士になってゆく、そのような回路である。「努力」した人間にとりとても自然なことのようにも思えるが、そのような回路から逸脱した人々のことを勘案すると、その作為性は明らかだろう。

民による武士権威への一種の憧憬は、地域社会の中での差異化、自分は、自分の家はほかとは違う、という優越意識をとともうとともに、生活の基盤をなくし納税などとても覚束ない人々には、道徳観と縁遠い人々と同じような眼差しが向けられ、努力を怠った役立たず、というような見方さえ生まれる。さらには、様々な障害が体にあらわれるのは、宝を生み出す手や足を怠惰なためつかわなかったか

らであるとか、とくに女性(妊婦)が宗教的、民俗的なタブー(禁忌)をおかしたからなどとされ、障害を持った人々は勤勉をはじめとする道徳規範に逸脱した報い、という捉え方さえみられるようになる。そしてこのような考え方に通底するのは、「神国」「日本(人)」というような、一種の帰属意識としての民族観と考えられる。これは武士階層が強調したというよりも、民自身が「神国」の「日本人」であれば、優れた道徳的資質を持つという、中華意識の自民族中心的な変容にとともなう認識だろう。

冒頭に記したように、本書は私の子供への思いが下支えしている。彼は重度の知的障害者である。彼は一人の人間としてどのように生きてゆけるのか。働けず納税などとてもできない彼が人として生きる意味は何なのか。私は彼から歴史を学ぶ問題意識を与えられ続けている。権威や道徳という規範意識を軸に人を差別する回路が形成され、税負担の体系からドロップアウトした人や障害を持った人々へ、同じような眼差しが向けられていることにはいささか寒気さえを覚える。そして、その眼差しはおそらく賤民や異国人認識にも通じる。抽象的な表現だが、「泰平」を謳歌する民は、ある規範観念に縛られ始め自在な心を失いかけた人々」とでもいえよう。

以上のごときささやかな、しかし多少の思い入れを込めた議論を、民の生活の場(地域社会)に即し、その行政支配を行う武士・領主層による民政の基調と展開をおいながら、北部九州の諸藩(佐賀藩・対馬藩・小倉藩)を対象に行ったのが本書である。



東京：校倉書房、2009年1月刊

## 『近代日本の陶磁器業』

宮地 英敏

(産業資料情報講座)



昨年12月、名古屋大学出版会から『近代日本の陶磁器業－産業発展と生産組織の複層性』を上梓することができました。大学院の修士課程で研究対象を定めて以来、10年の歳月をかけてようやく一冊の研究書を出版できたこととなります。本書執筆の依頼は5年前に受けているので、それから数えても既にかかなりの年月が経ってしまいました。

本書のもとになる論文を幾つか査読誌に発表し、学会報告を重ねていたところを、名古屋大学出版会の編集者さんが目にして声をかけていただいたところから、本書の直接の執筆ははじまりました。大学院生や初職に就いたばかりの頃の活動でも、学術出版社の編集者というのは目を配らせてチェックしているのだと感心したことを鮮明に覚えています。院生の皆さんには、査読誌や学会報告には、そういうチャンスも眠っているのだと伝えたいところです。

ところが、声をかけて貰ってから5年の歳月がかかっていることから分かるように、一冊目の研究書を書き上げるという作業は、想像していた以上にハードな仕事でした。一番ハードな点は、個々の論文を書き上げる要領だけでは、研究書にはなってくれないことでした。個別の論文は、問題を提起して、研究史の整理と、データ分析と、まとめをすれば成立します。しかし、一冊の研究書(博士論文でも同じことは言えますが)というものは、この論文を書くときのテクニックが通用しなかったのです。

なぜならば、研究書の問題設定に対して必要となるデー

タ分析が、そんなに簡単に用意することができなかったためです。個別の論文ならば、データがない研究はしない、できない、いつかやるという選択をするだけです。しかし、既存の論文をベースに研究書として一冊にまとめたものを出版するとなると、そうは言われていられない箇所がいくつか出てきます。このため、1章分のデータ収集と分析を新たに行い、他の章も加筆修正を行っていたために、これほど時間がかかってしまったわけです。

本のあとがき等を読んでみると、編集者への謝辞をしばしば見かけるのですが、以前はその意味があまり分かっていませんでした。しかし自分がいざ研究書を一冊執筆する立場になると、編集者さんからのアドバイスが非常に有益でもありました(内容に関する責任すべてが、筆者に帰するのは言うまでもありませんが)。教員、大学院の先輩や仲間、査読誌の匿名レフリーなど、研究者としてのスタンスからのコメントはいくらでも受けてきましたが、編集者のコメントというものは視角をまた異にしていたためでもあります。研究書を一冊書き上げるというのは、苦しいけれども知的刺激に満ち溢れた日々でありました。

以上のようにして出来上がった本書ですが、次に簡単に内容紹介をしておきたいと思います。『近代日本の陶磁器業』というタイトルをしていますが、幕末から戦間期までを対象として、日本の陶磁器業を経済史・経営史的なスタンスで分析した研究書です。陶磁器には美術史的な側面や、生活史的な側面などありますが、本書では産業としての陶磁器に主に特化して分析をしています。

陶磁器業のような産業は、従来は「在来産業」や「中小企業」という枠組みで語られてきました。これを、サブタイトルにあるように「生産組織の複層性」という概念で整理しなおしたのが本書の大きな特徴です。「複層性」とは「重層性」と違うのかという質問をよく受けます。類似の枠組みは19世紀のフランスの政治思想家であるトクヴィルが、アメリカの政治社会を評する際に複層性を見出したところにあります。そこでは、単に並列しているだけの重層性ではなく、時には並列に、時には秩序だって、また時には影響しあいながら存在している複層性を提示しています。

## ○○○ 自著を語る

「重層性」ではなくこのような「複層性」が、近代日本の産業を分析する際に重要であるというのが、本書の大きなメッセージでもあります。大企業と、中小企業と、小零細企業が、時には並列に、時には秩序だって、また時には影響しあいながら存在していたのが、陶磁器業を例としながら考察した日本の産業の特徴でした。

もう少し具体的に紹介しますと、日本の代表的な陶磁器産地として、瀬戸、東濃、名古屋、有田、京都などがあります。このうち、名古屋に拠点を置くことになる森村組＝日本陶器（現ノリタケカンパニーリミテド）などが、アメリカ向の高級品を生産していたのに対して、当初、瀬戸や東濃の中小・小零細メーカーは国内向や東アジア向の日用品を生産して棲み分けをしていました。ところが、第一次世界大戦頃を画期として、瀬戸や東濃の中小・小零細メーカーが、日本陶器に代表される大企業の傘下に組み込まれていった、そのような様子を明らかにしています。以上のような意味で、下請制度の歴史的な起源も考察対象としているといえるでしょう。

また、有田や京都の陶磁器メーカーは、日本陶器や瀬戸・東濃の中小・小零細メーカーとは異なり、美術品としての陶磁器という側面によりこだわることで、別の市場を志向していました。こちらは、ピオリ／セープルによる「柔軟な専門化」の一事例として位置付けることができるでしょう。有田より京都の方がこの戦略に成功することにはなりません。先ほど、美術史的な側面や生活史的な側面はあまり踏み込んでいないように書きましたが、陶磁器という特徴的な商品を見る際には、やはりこういったところも見逃せないで、そこが難しさでもあり、面白さでもあるように感じています。

以上のような経済史・経営史の文脈での内容紹介を行ってききましたが、本書はもう1つ歴史学としての側面も併せ持っている書です。大学院から経済へ進学しましたが、学部を文学部の日本史学研究室で学んだために、三つ子の魂百までではありませんが、歴史的な部分にも大きく興味を抱きながら執筆していました。経済史・経営史は経済学・

経営学の理論との接近が大きいので取っ付き辛そうですが、以下に述べるように歴史学の文脈で説明できる部分も多く占めています。

例えば、第3章に起立（きりゅう）工商会社という陶磁器等の貿易商社が登場します。起立工商会社を創業したのは松尾儀助という肥前佐賀藩出身の士族でした。時はまだ明治も始めでありまして、大隈重信などが明治政府内にいた時代の話です。大隈重信や佐野常民などの佐賀藩出身の政府高官たちは、日本にも貿易商社を育成しようという段になって、同郷の松尾儀助に白羽の矢を立てたのです。長州藩の井上馨が三井物産を育成していく時代です。大隈重信が政府から下野せず、また松尾儀助の貿易が上手くいったのなら、近現代の三井物産の地位に起立工商会社がいたかも知れません。

一方、第8章で扱っている森村組という貿易商社のケースは対照的です。森村組は近世から続く商家でしたが、特に土佐藩への武器・馬具の納入で実績を上げていました。土佐藩もまた薩長土肥の一つですから、起立工商会社と同じように森村組も政府の手厚い援助を得る可能性はありました。ところが、板垣退助ら土佐藩の面々は、佐賀藩の面々よりも早く明治政府から下野してしまいます。森村組はこのために、政府の援助をあまり期待できない状況でありました。

このため森村組では、政府から距離をとった活動を余儀なくされてしまうのですが、その際に森村組へ貿易商社の道をススメたのが福沢諭吉でした。土佐藩との取引がメインであった森村組ですが、幕末開港の時期に、たまたま中津藩との取引も行い、そこで福沢諭吉の知遇を得ていたのです。慶應義塾からの人材供給も受けながら、森村組は陶磁器輸出に大成功していきます。

残念ながら、紙幅の関係でこれ以上色々と説明していくことはできませんが、近代日本という枠組みの中で、様々なタイプの商人やメーカーの活躍を描いています。本書を通じて、経済学・経営学と歴史学との複合領域である、経済史・経営史の魅力が伝わればと思っています。

## 書評／三隅一人著『A FORMAL THEORY OF ROLES』花書院(2007年、194頁)

小杉 考司

(山口大学)

社会とは何であるか、という問いに近づく一つの方法は、しばしば社会に対比して捉えられる「個人(あるいは主体、心)」と「社会」の接合点に焦点化し、個人だけでも社会だけでも還元しえない事象を問題とすることである。本書はその事象を「役割」という概念に定め、Boolean Modelというツールを手に、フォーマライズしていこうとする意欲作である。

本書の構成は二つの部、九つの章からなる。以下、順を追って簡単にその内容を紹介していく。

第一章は全体の導入部である。ここではこれまでの役割研究を概観し、二つの潮流を紹介する。一つは、役割の持つ規範的側面を捉える規範論的潮流であり、他方は役割を主体がどのように捉えるかを問題とする解釈論的潮流である。これは個人と社会、部分と全体、ミクロとマクロという普遍的な対立図式でもあるが、著者はこうした対立を相対化したところに、新たな役割概念の有用性を見いだす。役割に含まれる期待、概念、行動の三つが、解釈、規範、交渉、具現化という諸側面にどのように配置されているかを示す図(本書 Pp.12, Figure 1-2)は、非常にわかりやすい。

第二章から第六章は、第一部「役割の基本的メカニズム」として、本書の基本的ツールとなる Boolean Model と、その静的な特性が詳述される。

第二章 Boolean Role Image Model では、役割についての定義と、役割知識、役割イメージ、役割識別(Validation)の定義が与えられ、二つの要素を含むある役割  $X=f(A,B)$  が行為者と観察者の間でどのように共有されるかが、プール形式のモデルで表現される。行為者はあるイメージにもとづいてある要素を呈示し、観察者は自分のイメージに基づいてそれを判別する。比較的単純な仮定から、豊富な様相が生みだされる。

第三章 Model Analysis for Multicultural Issues: Two Levels of Dyscommunication では、第二章のモデルにおける要素を少し拡張し、 $X'=f(A,B)$  と  $X''=f(A,C)$  といった部分的に共有するも異なる要素をもつ、行為者と観察者のディスコミュニケーションを問題にする。タイトルにもある「二つのレベル」とは、えてして行為者・観察者の出会いにおける初期段階に見られる、イメージ要素が合致しないことによる

識別ミスの問題と、関係が深まりイメージの共有がすすんだ後でも生じる、イメージ要素に対する重み付けの問題から生じる識別ミスの問題である。この二点を慎重に区別されたことが、本モデルをより味わい深いものになっている。

第四章 Model Analysis for Role Sets は、まず役割が葛藤するとか、役割が適切であるということはどう考えるべきかを、整理するところから始まる。その上で役割要素がまとめ上げられる方策として、役割の和をとるか積を取るか、という方策が示される。役割が葛藤するとか適切であるという表現を Boolean Model で鮮やかに表象するところに、通常言語では不可能な理解しやすさを提供する、数理モデルの長所がいきている。

第五章 Empirical Analysis of Role Image: Disputed Points on the Sexual Divisions of Labor では、調査研究のデータを本モデルに当てはめる一例が示されている。ここに、数理モデルを机上の空論に終わらせることなく、実証的・実践的方法論に拡張しようとする筆者の挑戦が見て取れる。評者は社会心理学の一学徒であるが、過剰に実践的なデータに拘泥し、抽象化・理論化することを忘れてしまった社会心理学の悪しき側面を顧みるに、このような理論家の側からの実証データに対する積極的なアプローチは、高く評価されるべきであると考えられる。

第六、七、八章は第二部「役割のダイナミクス」である。ここまでの静的なモデル描写にリアリティを感じられなかった人も、第二部に見られるダイナミズムを描写しうるモデルの拡張性に驚かれることと思う。

第六章 Role Change through Role Image Modification では、同一化と差異化という役割イメージの二つの変化が、個人内レベルと個人間レベルでいかに現れるかが示される。役割イメージがまず個人内で修正され、ついで実際の行為とその識別によって二次的な修正が生じるとし、修正に伴う役割イメージの推移がどのように収束するかが、理論的シミュレーションと推移グラフによって表現されている。プール和、プール積、その混合型で様々なバリエーションを描き出す様は、イメージの自律的变化についてモデル化できる可能性を強く訴えかけてくる。

第七章 Micro Dynamics in Role Relations: Complementarily

and Balance of Role Expectationsは、第一部の冒頭で触れられた役割の「期待」「概念」「行動」のトライアングルとHeiderのバランス理論を融合する試みであり、ミクロとマクロをつなぐための素朴なモデルの提案である。主体の中に埋め込まれたこのトライアングルは、Heiderのバランスに則して読み解かれる。さらに「期待」は常にある対象に対してなされるのであるから、その対象の「概念」と接続される。両端に個人のトライアングルをおき、期待と概念の接続を加えたダブルコンテインジェンシーグラフは、個人と社会の架け橋についての筆者なりの解答であり、最も慎重に読解されるべき所であろう。

第八章 Strategic Image Modification: Rationality and Complementarilyは、七章で述べられたダブルコンテインジェンシーグラフのコアと、ゲーム理論の利得行列を並列的に取り扱うという内容になっている。グラフと利得行列をそれぞれ役割次元とゲーム次元に位置づけ、対応づけて考えることで、二者関係のダイナミックなプロセスを表現する。本モデルは七章と同じく、ミクロ-マクロリンクを解きほぐす手がかりとなろう。

以上を踏まえて、第九章では、本書の三つのコア、役割の知識と識別、役割の内的構造、役割の変化についてのまとめと展望が述べられている。

冒頭に述べたように、役割を個人と社会の接合点と見、丁寧にフォーマライズしていく過程はあざやかという他はない。一つだけ批判的に指摘することができるのであれば、個人内イメージ(ミクロプロセス)と個人間関係(マクロプロセス)の接合が、あまりに素朴にすぎないだろうかという点である。Lewinの最後の弟子であるKelleyは、利得行列を用いた相互依存性理論において、最後まで相互依存性、生活空間、そしておそらくはHeiderのバランス概念までの統合を志向し続けていながら、結局は個人の枠組みを超えることができなかった。Lewinが生活空間を呈示したとき、Heiderが主体と事物と媒介の関係を考えたとき、Kelleyが所与行列と実効行列を想定したとき、取りこぼされたものは何だったろうか。先達だけではない。ミクロ-マクロダイナミクスを考える人は誰も、個人の心と他者、そして実社会の行為をどう接合するか、という問いに身悶えせずにはいられないはずである。これを不良設定問題として、捉えられる枠組みを適切に設定し、理論を構築していくプロセスを否定するつもりはない。しかし、この答えのない問いを問い続けてこそ、抽象化されたモデルが生きてくるだろうし、実態に即したデータ化、モデル化が人間社会の理解を促進することになるに違いない。この問題に取り組み、モデル化を成し遂げた筆者のように、一人でも多くの

(数理)社会学者が、社会とは何か、個人とは何かを考え続ける試みに参加してくれることを望む。(数理社会学会『理論と方法』第44号(2008年)、164-166頁より転載)

### 『A FORMAL THEORY OF ROLES』書評リプライ

三隅一人(九州大学)

本書は、関西学院大学に学位請求論文として提出した英語論文にもとづいており、その経緯から英語で出版した。そもそも英語にしたのは、本書の大部分を2005年のアリゾナ大学滞在中に執筆したことによる。幸い、ほとんど博士論文の内容のまま、勤務先の『比文叢書』(SCS Series)という刊行助成事業から出版許可を得ることができた。そうして迅速に刊行できた反面、二重三重に手に取りにくい本になってしまった。それだけに、このたび本誌で書評にとりあげていただいたことを大変嬉しく、また、光栄に思う。そして何より、評者に感謝申し上げたい。評者は、たどたどしい英語に悩まされたことと推察するがそのお叱りには一切触れず、内容の評価に徹していただいた。また、コンパクトかつ的確な内容の紹介は、本書をていねいに読んでいただいたことを如実に示している。そこに費やされた時間を思うだけでも、痛み入る次第である。

その上に、貴重なご批判をいただいた。ポイントは「個人内イメージ(ミクロプロセス)と個人間関係(マクロプロセス)の接合が、あまりに素朴」というコメントに集約されていると理解する。このコメントは奥深く、それをすべて汲みとることはできないが、せっかくだいたりプライのチャンスなので思うところをいくつか述べたい。

まず、このご批判は基本的にはその通りであることを認めよう。本書は、数ヶ所で明言しているように、個人における社会の発現という根源的問いを素通りしている。社会を前提にしなければ在り得ない役割イメージが、在るところから定式化を出発した。役割に関する2つの主観的世界が互いに結ばれるときに何が起こるかに立ち止まらず、連結を所与としてその論理パターンから分析を出発した。そうやって、いわば意味を運ぶ器の仕組みに焦点をあてており、評者が見透かすように「捉えられる枠組みを適切に設定し、理論を構築していく」ことをねらっている。しかしながら、著者としてもそこで「身悶え」を切り捨てたわけではない。とりわけ、この批判が直接向けられる7章と8章は、解釈支援型フォーマライゼーションと称する独特のスタンスをとっている。簡潔なモデルに準拠しながら、むしろそのモデルがとらえきれない多様な現実世界を整理する、そうした認識的道具として数理モデルを用いる提案である。そこでは、役割関係がそれとして、あるいは別の利害関係

との間でモデル上示す矛盾が、現実にかかることの社会的含意に執拗に立ち止まり、著者なりの「身悶え」を呈したつもりである。

そのスタンスはある意味で、一見して簡潔な利得マトリックスの変換に、社会的動機を含む効用形成の多様なプロセスを読み込もうとしたケリーらの相互依存論に近いのかもしれない。もしそうだとすれば、この点でのレビューの弱さを評者の批判として受け止めなければならない。ただし、多水準問題（ミクロ・マクロ・リンク）という一般的な観点からすれば、本書が囚人のジレンマやフリーライダーを焦点とする行為系の議論を遠ざけたのは意図的なことである。それは、本書の照準を認識次元の多水準問題に定めたかったからである。それを端的に示すのが役割知識という観点である。すなわち、本書は役割知識の構成論と変動論、そしてそこに組み込まれた行為系とは異なる多水準問題の模索と定式化、そして分析を目論んでいる。「個人と社会の架け橋についての筆者なりの解答」は7章に集約されるのではない。むしろ第一部こそ、相互補完的な役害関係ではないが、同一の役割イメージに関する認識的合意が成功／失敗する仕組みとして、役割知識の基本的な多水準問題を呈

示しているのである。その試みがどこまで意味論的なフォーマライゼーション（おそらくそこには別の「身悶え」がある）に迫り得ているかは、改めて読者のご批判を仰がなければならない。

さらに自己批判的にいえば、論点はここで再び第7章における評者の不服に引き戻される。議論が役割の補完的關係として複数個人間に及ぶとき、2つの主観的世界を結ぶのはどうしても社会的行為（役割行動）でなければならない。本書では、そこでの行為を他者に対する役割期待としてシンボリックな解説に付されるものとし、認識次元に止まり続けた。しかし、それはモデルの読み方次第である。背後には行為次元のやりとりが想定されるのであり、そこでは、役割以外のさまざま文脈を含めた動機が介入しているであろう。8章ではこの2次元を分析的に区分けしてみたが、その混在の姿がそれとしてみせる多水準問題にこそリアリティがあるということも、その通りだと思う。その意味で、改めて評者のご批判を真摯に受け止めたい。

その上で、評者ととも、こうした多水準問題への新たな挑戦が続々と現れることを待ち望む。（数理社会学会『理論と方法』第44号（2008年）、166-168頁より転載）

# 新キャンパス施設の特徴

## — センターゾーン保全係長・崎村利一さんにきく —

聞き手(服部英雄・松井康浩)

### 1. 水道

Q：ころなしかな新キャンパスの水が美味しく感じられます。

A：六本松では水道管は鉄管(白ガス管)で、どうしてもサビが出ました。色合い、味に影響があったかも知れません。ここは全部ステンレス管で供給しています。衛生的だし味もよい。もともとは瑞梅寺ダムからの水です。玄界島に行くライン(配水路線)を使用し、大学移転にともない管の径を拡大しました。センターゾーン、ビッグオレンジ北側の竹柵のなかに二階建ての給水センターがあり、大きな水槽が設置されています。ウェストゾーンの工学部にも、比言文棟にも4台か5台でポンプアップします。



センターゾーン保全係長の崎村利一さん

Q：大学の造成時に水が足りないといわれていました。

A：汚水の再生処理施設が給水センターにあります。トイレに流れた水以外はみな給水センターに集まります。比言文棟の6・7階の実験施設で使った水はいったんここに戻ります。そこで生物処理が行われます。菌が不純物を食べる。ヤクルトの容器がいっぱい置いてあり、その容器にいろいろなタイプの菌が付着する。それにさらに膜処理を施します。逆浸透膜で海の中道にある海水を真水にする設備と同じもの。2, 3日で純水ができます。飲めるぐらいの水質ですが、法令でいったん流した水は飲料水に使えません。それで再度実験水とトイレ水に再利用します(区別の

ため蛇口にラベルが貼ってある)。トイレの汚水そのものは再処理に回さず、市の処理施設に流します。再処理水の多くはトイレで使われ、下水に回りますから、いつまでも実験水に循環されて濃縮され続けることはありません。

Q：池が二つありますがその役割は。

A：1号館、生協の食堂から見える池は調整池。その下に昔からある大坂の池があります。九大は雨水をプールして利用することはできません。雨水は農業用水で元岡や桑原の農民に水利権があります。造成中に雨がふると泥水が大坂の池に入って付近の農民の方々が迷惑します。そうならないように調整池を作り、流量によっては大坂の池に配分するのです。東側は福岡市が造成中で、いろいろなところに調整池が作ってあります。

### 2. 電気：省エネの工夫

Q：比言文棟の研究室では、24時間、換気装置を作動させておくことが求められています。

A：これは建築基準法によるもので、いわゆるシックハウス症候群を防ぐために、原則として機械換気が必要ですからやむを得ません。また、これは新築当初のみの措置ではなく、今後も継続されます。

Q：夜の照明が華やかに感じられますが。

A：防犯上の観点からも照明は不可欠です。タイムスケジュールに従って照明の調整が行われており、現在は22時に照明が半分は落とされ、明け方までその状態が続きます。夜間照明に関して、たとえばもっと明るくすべき、もっと照明を落とすべきといった要望が多ければ、現在の設定を変更することも可能です。技術的な問題はありません。

Q：省エネルギー対策としては。

A：省エネタイプの照明器具を広く使用しています。比言文棟の建物内照明及び街灯が消費する電気代は、六本松のときよりも少なくなりました。また廊下やフロアなどの消灯が自動で行われるようになっていることも、省エネ対策の向上に貢献しています(この設定も変更可)。

Q：夏場には特にエアコンの使用が問題となりますが。

A：六本松ではルームエアコンが一般的でしたが、比文言文棟ではマルチエアコン仕様となっています。これは集合空調の仕組みで、かつ稼働は電気ではなくガスエンジンで行われます。したがって電力消費は大幅に圧縮され、夏場の電力利用ピーク時の負荷を減らすことに貢献しています。その代りガス代がかかりますが、それにしても費用はかなり圧縮されました。なお、比文言文棟の一部の実験フロアなど教員研究室数が少ないところでは、集合式だとかえって不経済になるため電気式のルームエアコンが使われています。なお、エアコンの運転・温度設定は個々の研究室で可能ですが、もちろん夏場は特に省エネへの協力を求めています。

Q：全学教育の授業が主に行われる2号館などでの空調は。

A：2号館等の教室では集中管理方式が取られています。この点でも最新の設備が導入され、二酸化炭素濃度や不快指数といった数値が基準を超えた場合に自動的に稼働させることが可能ですが、現在、数値に係わる基準づくりが進められています。なお、講義室の換気は二酸化炭素濃度に応じて自動的に行われます。

Q：太陽光は利用されているのですか。

A：センターゾーンでは太陽光を活用する仕組みがいたるところありませんが、伊都地区全体では太陽光利用設備が導入されています。太陽光の利用に代り、センター2号館や給水センターでは屋上緑化が行われました。建物内の温度低下に成果が見られます。また比文言文棟等では外壁の断熱に力を入れましたので、この点でも省エネ効果が見込まれます。

### 3. 動物や虫対策

Q：鳩やそのふんを時折見かけますが。

A：現在、伊都キャンパス全体での対策を行うべく、取り組みを開始しています。

Q：ヘビやイノシシ等の野生動物については。

A：まだ見かけることはないようです。他方、雨模様ときには、カエルが付近の調整池などで賑やかな鳴き声を響かせています。自然に囲まれていることが実感できますね。

Q：虫対策はいかがですか。

A：とりわけ夜間に照明設備に集まってくるため、虫が寄り付きにくい照明の設置を検討しています。工学部地区で

は付近に竹藪があり蚊の問題が指摘されてきましたので、センターゾーンでも今後、対策を準備する必要があります。

### 4. その他の特色

Q：センターゾーンには、記念として六本松から運び込まれたものがあると聞いていますが。

A：メモリアル・ポットが設けられました（「九州大学」の銘板に向かって右手）。六本松キャンパスにあったソテツ、石、ワシントンヤシ、つつじ、水仙、グラウンドの土や芝、亭々舎の庭の苔や舎内に上がる際の踏み石などなどです。また、キャンパスモールにはその他の仕掛けも施されています。たとえば、六本松キャンパスや箱崎キャンパスなどの方角を示すパネルがモールに敷き詰められたタイル内に埋め込まれています。探してみてもいいかもしれません。

Q：小さな古墳のような形をしたものは何ですか。

A：築山のことでですね。あれは、センターゾーンの売り物であるグリーン・コリドー（敷地内の保全緑地間を結ぶ生物の移動経路）の一部です。幾何学模様により「知」のイメージを打ち出したもので、上から見ると円形、横から見ると三角に見えます。

Q：比文言文棟の売り物としては。

A：生物標本室などはいかがでしょう。貴重な昆虫等の標本が多くあり、博物館並み(?)の水準にあります。また、比文言文棟に配置されている各種の実験設備も最新式のものも多く揃えられています。クリーンルームや恒温室などが設けられ、より快適で高水準の研究教育環境が実現しています。（詳しくは19-20ページを参照）



築山を背にしたメモリアルポット



# 生物多様性ゾーンー里山の自然とふれよう

矢田 脩

(地域資料情報講座)

伊都キャンパスに移転して、私たちの研究環境は大きく変化しました。最新の設備をもった比文・言文棟での日々の研究、教育の快適さを皆さんが実感するにつれ、豊かな将来を保証してくれる基盤を得たことは移転の大きなメリットの一つであったと再確認されていることでしょう。もちろん、六本松時代に比べて、通勤がたいへんになったり、買い物が不便になったり、何かと勝手がちがってまだ本来のペースを取り戻せていない皆さんもおられるでしょう(実は私自身もそうです)。しかし、この伊都キャンパスの最大のメリットは、私たちが集うキャンパスの中にいつでも気軽に接することができる豊かな自然を得たことだ、と私は思っています。

ビッグオレンジのバス停を降りた途端に、美しいキャンパスの姿とともに、山々に囲まれた緑豊かな雄大な風景が目に入ってくる。ヒバリなど野鳥の囀りが心地よく耳に入ってくるし、チョウをはじめ虫たちの姿もあちこちで見られる。休憩時間、昼休み、仕事に疲れた合間に時間に応じて様々な自然とすぐさま触れることができる……。天気の良い日にはこれだけでも大きな癒しといえますし、ビルに囲まれた六本松キャンパスの環境とは大きな違いがあります。

そもそも、九大の統合移転事業は「環境との共生」という理念をかかげて実施されており、とりわけ「生物多様性の保全」を最大限配慮するよう努力されてきました。本事業に中心的に関わってこられた矢原徹一教授は、キャンパスの造成・整備にあたって、「種の絶滅を起こさない」「森林面積を減らさない」という大目標をかかげ、着実に達成してこられました。そのお陰で、私たちが移転してきた今年度にはすでにキャンパスの多くは緑豊かな自然に囲まれていました。伊都キャンパスへの移転はまだ完全に終わっておらず、新たな建物の建設などキャンパスの改変がかなり行われるでしょうが、その理念は貫かれるに違いありません。

さて、伊都キャンパスは自然が豊であると書きましたが、それは「原生的」な自然ではありません。キャンパス内に多くの遺跡が見いだされたように、ここには昔から人が住み、森林を利用したり、農耕を行っていました。九大が伊都キャンパスの用地を購入した時にも、その多くは林業や農業に

使用されており、いわゆる「里山」的環境がその多くを占めていました。したがって、伊都キャンパスは、里山の自然を土台にして造成されたものです。自然の保全と遺跡の保存を配慮した上でキャンパスの造成・整備が行われてきましたが、そのためにまず検討されたのが、ゾーニングです。大雑把に、敷地以外のキャンパス全体を、自然を保全・研究する地域、史跡を維持管理する地域、森林を保全する地域、の3つに区別され、さらにそれぞれが分割され全体で6つのゾーンに分けられています(図1)。中でも、森林と水辺が接し、生物多様性が最も高く、また希少種が多く生息している地域を「生物多様性ゾーン」として本キャンパスの自然保全のコアエリアに位置づけられています。幸い、「生物多様性ゾーン」は、現在の比文・言文棟からはそう遠くない位置にあります。

それでは、「生物多様性ゾーン」に皆さんを案内しましょう。といっても、私も今年4月から現地の探索、予備調査をはじめたばかりで経験も浅く、目にした自然もそう多くないことをお断りしておきます。

比文から生物多様性ゾーンに入るには、本当は比文言文棟の裏側のバス道路を隔てた「史跡の森探索ゾーン」の西側部分を横切っていくのが早道なのですが、現在のところ道が整備されていません。したがって、今は工学部前のアカデミックランタン横の駐車場から右に下り、左に折り返して多様性ゾーンに入るルートがお勧めです(図3、○印からはじまる赤紫色のライン)。



図1 伊都キャンパス 生物・史跡ゾーニング(九大HPより)  
<http://suisin.jimu.kyushu-u.ac.jp/archive/examresult/vegetation/index.html>



図2 生物多様性ゾーンを望む(区間②より)(2009年4月8日)

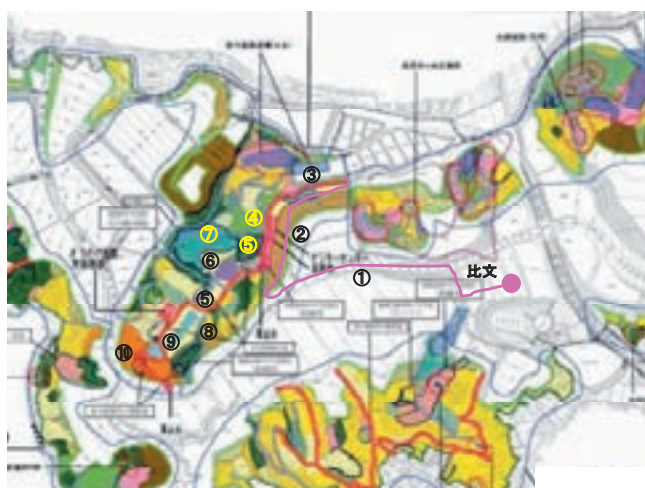


図3 伊都キャンパス「生物多様性ゾーン」センサスコース(案)

図2はアカデミックランタンから右に少し下った道から多様性ゾーンの入口付近を眺望した写真です。伊都キャンパスへの移転が一段落してすぐ私が現地を訪れた時のスナップで、新芽がやっと展開してきたところです。現在では、もちろん、緑がもっと濃く深くなっています。

図3は、図1を拡大し、比文から生物多様性ゾーンにいたるメインルートを示しました。私たちは、このルートに沿って定期的に調査をしようと思っています。データをとる必要から、ルートを①から⑩までの区間に区切ってみました。この区間分けは、環境のおおよその違いに沿ったものですが、誰でも調査できるように、わかりやすい目安を区間の境界にしてあります(まだ試行中ですので詳細は省いてあります)。図4は、生物多様性ゾーンの中心的部分を示した環境写真です。写真の④から⑦は図3の地図上の番号と対応しています。このルートに沿って、定期的に(毎月1~2回)、同じコースを同じ調査法で生物の確認と数のカウント(センサス)を行います。そうすれば、皆さんも、この地域

の生物のモニタリング(監視)に参加することができます。

実は、伊都キャンパスの事前アセスメントの一環として、この地域の生物のリストなどの基礎調査はすでに提出されていて、今後、生物相がどのように変化するかたいへん興味をもたれます。この「モニタリング」は環境保全の基礎資料として今たいへん重要視されています。誰でも参加しやすい対象は、チョウやトンボなどの大型の昆虫類、鳥類、植物、水際の生き物(カエルやイモリなど)などです。今は、デジカメが普及しているので、名前が不確かな場合はデジカメで記録しておくのがベストです。後からでもかなり正確な同定が可能ですので。

調査・研究面について筆が走ってしまいましたが、多様性ゾーンは散策するだけでももちろん十分楽しめます。シーズン中(4~11月)は、よく晴れた午前中~午後2時頃までに行けば、風も穏やかで、森林浴としても最高です。里山林の緑のかぐわしさと生き物たちの息吹を直接感じていただけに違いないと思います。ただし、ここは生物多様性が高いので、当然、カ、アブ、ハチ類なども少なくありません。虫に弱い人は長袖、長ズボンを準備するとともに、防虫スプレーや虫さされ薬を持参されるのが無難です。

なお、皆様が多様性ゾーンを訪れるときには次の「伊都



図4 ルート各区間の環境④~⑦(里山的环境がよく残されている地域)  
⑦右下の写真は、ここで見られたクロヒカゲ(福田 治氏撮影)

キャンパス保全緑地の利用に関する注意事項」に十分留意することが要請されます。

1. 放流など他の地域から生物を持ち込まないこと。
2. 動植物の捕獲・採取の禁止。
3. 夜間の立入禁止(マムシやイノシシがいます!)
4. 野生動物監視カメラや環境計測機器などの保守。
5. 市民ボランティア活動への協力。

詳しくは、以下の九大ホームページのウェブサイトを参照下さい。

[http://suisin.jimu.kyushu-u.ac.jp/archive/examresult/vegetation/vegetation\\_rule.html](http://suisin.jimu.kyushu-u.ac.jp/archive/examresult/vegetation/vegetation_rule.html)

## かつて、そこでは：伊都キャンパス・センターゾーンとその周辺の遺跡

溝口 孝司

(基層構造講座)

新緑が濃い夏色に移り変わりつつある朝、九大学研都市駅前からバスに乗ると、そろそろ田植えがはじまってもよさそうなひろびろと平らかな田園風景のかなたに、伊都キャンパスの建物群が、らくだのこぶをつらねたような低いやまなみを背景に、つよくなりはじめた日差しを照り返しているのがみえてくる。周船寺経由ならば、瑞梅寺川にさしかかるあたりから、さっとひらける視界の左側(西側)に、前原市街地にむけて、北から突き出す緑の丘陵がみえるだろう。その付け根のあたりは、伊都キャンパスがのっている丘陵(以後、「元岡丘陵」と呼ぶことにする)と接している。そのあたりの地名を「泊」という。海原をおもわせる水田のひろがりとともに、なにやら思わせぶりな地名だ。

右手に視線をうつせば、坦々とつづく風景は、唐突にそそりたつ浜崎山と毘沙門山、それから、それらとキャンパス周辺の山塊とをつなぐ砂丘とにきりとられた青空につづいている。首のいたくなるのを覚悟でさらに右うしろの方(南の方)をふりかえると、こんもりとした、今山のみどりが見えるはずだ。

瑞梅寺川は、今山と浜崎山にはさまれたあたりで、博多湾にそそぐ。河口は、ちょっとした湾になっている。今津湾である。池のように小さくて、静かな、干潮時には、ちょっとした干潟のできるささやかな入り海。じつは、この入り江は、さきほどの田園風景いっばいにひろがっていた、「古今津湾」とよばれる入り海のなごりなのだ(図1)。周船寺、泊、そして、さきほどの砂丘、毘沙門山、今山をむすぶ三角地帯には、縄文時代以来、古代まで、広大な水面がひろがっていたのだ。また、糸島半島西側には、雷山川河口部から、「古加布里湾」とよばれる入り海がはいりこんでいた。そして、さきほどふれた泊、それから志登のあたりは、せまい陸橋部をなして、前原の水田地帯と、元岡丘陵、その両側・背後にひろがる山塊が形成する半島部とを繋いでいたのである。陸橋がもっとも細くなるころでは、その幅はたかだか1キロ程度だったようだ。現在糸島郡としてひとくくりにされているこの地域は、古代、現在の前原市域周辺は「怡土郡」、半島部は「志麻(嶋)郡」とよばれたが、後者は当時、まさに「嶋」だったわけである。ちなみに、『魏志倭人伝』に記録されるいわゆる「伊都国」の中核部は、前原市街地の南にひろがる扇状地状の広大な水田地帯にひろがる、三雲

遺跡群であることが確実である。伊都キャンパスの「伊都」が「伊都国」にちなむものならば、むしろ、「志麻キャンパス」、もしくは「嶋キャンパス」とした方が、ほんとうの地元の名の歴史の香りを伝える意味で、よかったかもしれない。



図1 糸島半島の遺跡群

余談はさておき、そのようなわけで、元岡丘陵の南側、センター2号館から見下ろす水田地帯は、弥生・古墳時代には、現在の丘陵裾からさほど遠くないあたりを岸辺とする、広大な入り海だったのである(図1)。この入り海を見下ろす丘陵には、小さな流れに刻まれた谷筋が無数に入り込み、旧石器時代から、ひとつひとつの活動の場所、すみかとなってきた(図2)。センターゾーン敷地内(具体的には現在のセンター二号館からビッグサンドのあたり)からは、縄文時代早期(縄文時代は、通常、草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の六つの時期に大別される。早期はいまから約9,000年前)の集石遺構(ある種の炉の跡と考えられる)多数や焼土面、また、石鏃、石槍などの狩猟具、石皿などの食料加工具が見つかった(福岡市教育委員会による元岡・桑原遺跡群(九州大学統合移転地遺跡群：以後「遺跡群」と略称)第3次調査)。狩猟具の多量さと、のこされた多数の炉跡から、移動性の高い生活をおくっていた当時のひとつが、狩猟、その他の活動のために、定期的にくりかえし訪れ、生活した場所であったと考えられる。また、旧石器時代のナイフ形石器、剥片尖頭器なども出土している。キャ

ンパス下の大坂の池（センターゾーン南側「九州大学伊都キャンパス」看板の下手の溜め池）から北西方向、総合グラウンド方向に入り込んでいた谷部を見下ろす尾根の斜面なので、風を防ぐのによく、水場も近く、また、谷筋から水場にむかう獲物をねらうのにも適した場所だったのだろう。



図2 元岡・桑原遺跡群調査地点位置図

弥生時代の遺跡は、入り海に面した丘陵南側で二カ所、北側の谷に面した一カ所が確認されている。センターゾーン敷地内では、弥生時代中期後半（弥生時代は、通常、早期、前期、中期、後期の六つの時期に大別される。中期後半はいまから約2,100～2,000年前）の、長方形の竪穴住居の跡が9軒以上、掘立柱建物の跡などがみついている（遺跡群第3次調査）（図2）。位置的には、上に述べた縄文時代生活痕跡の上層にあたり、大坂の池から総合グラウンド方向にのぼる谷筋の奥の東側斜面であった。現在の大坂の池あたりの谷底には、おそらく水田が営まれていたであろう。また、近傍に、同時期の墓地も存在していたにちがいないのだが、みかん園の造成などで、すでにうしなわれていたようだ。また、センターゾーン下の丘陵裾を、元岡の集落をぬけて歩いてゆくと、遺跡群の西南端の42次調査地点にたどりつく。ここでは、弥生時代後期から古墳時代の初めにかけての膨大な量の土器が、谷間を埋め尽くしていた。北部九州地方の同時期の大規模な集落遺跡でも、これほど多量の土器が、しかもあまり破損しない状態でひとつところに捨てられていた例はない。かなりの人数のひとつひとつが、おそらくかずおおくの村々から集まる饗宴的な機会が、

近傍でくりかえしもたれたことの痕跡かとも考えられ、その意味や機能が注目されるどころだ。ここからは、青銅製の小型の銅鐸や鏡もみついていることから、饗宴に、なんらかの祭祀的性格があった可能性も想定する必要がある。いずれにせよ、おおくのひとつひとつが集まって、飲み食いやお祭りをともにおこなうことによって、さまざまな社会関係を取り結んだり、再確認したりする場所がちかくにあった可能性がたかい。入り海奥の、港的機能をもった大きな集落がちかくにあつて、陸橋部から現在の前原市域に存在した複数の集落とならんで、物財やひと、また、さまざまな社会的利害が集積される、ある種の中心地的様相を呈していた可能性がある。

古墳時代（いまから約1,750～1,400年前）になると、遺跡群内に、前方後円墳7基をふくむ古墳群が形成され、西に近接する泊近傍の丘陵から遺跡群にかけては、さながら墓山の様相を呈するようになったようだ（図2）。前方後円墳は、数多くの血縁的集団から構成された地域社会のリーダーの墓であるわけだが、その立地は、地域社会の統合や、さまざまな交流・交渉の相手となる他社会への、力量のディスプレイの意味もこめて決定されたと考えられる。遺跡群内の前方後円墳の場合、入り海からの眺望、入り海の眺望を意識したものが多くは、ある意味当然とはいえ、特筆されるべきだろう。というのも、飛鳥時代以降、この地には、来目皇子率いる新羅征討軍が駐屯したり（『日本書紀』紀元602年）、また、奈良時代、8世紀半ばには、遺跡群対岸にそびえる高祖山に怡土城が築造されるなど、古代国家の外交国防の最前線となったからである。博多湾奥部の内湾であるだけでなく、周囲に比較的安定した農業生産基盤をもち、古くから大陸との交流・交渉をもつひとつひとつの住まう港湾的土地であったことが、当地のこのような歴史の展開の背景となったことはまちがいない。そのような意味で、遺跡群内前方後円墳に葬られたリーダーたち、また、かれらを支えた人々にとって、内湾をベースとしたさまざまな活動と他者との接触・交渉が、とても重要な意味をもっていたことはうたがえない。

これらの前方後円墳は、イーストゾーン下手にあった元岡E-1号墳（全長約35メートル、4世紀代の築造か）と、現在造成が急ピッチで進行中のイーストゾーン（文系地区）丘陵上にあつた、石ヶ原古墳（全長49メートル、6世紀なかごろに築造）（図2）をのぞいて、保存されている。前者からは、粘土槨につつまれた木棺のなかから、方格T字鏡一枚が発見された。また、石ヶ原古墳では、墳丘の断面の土層のはぎ取りがおこなわれ、また、石室石材の移設・保管がおこなわれている。これらは将来、復元・公開されることになっている。また、ドミトリー裏手の丘陵（水崎山）

○○○ 特集：新キャンパスガイド

からのびる尾根上に位置し、その性格の確認のために調査がおこなわれた金屎1号墳（全長24メートル、4世紀なかごろの築造）からは、粘土槨につつまれた木棺（腐朽して消滅していた）のなかから、二枚の銅鏡（菱雲紋鏡・芝草紋鏡）が見つかった。これらは、葬られた人物の頭部の両側におかれていたものとみられる。



図3 桑原石ヶ元古墳群分布図

7基の前方後円墳は、3世紀のおわりごろ（調査区外の、泊地区御道具山古墳）から上述の石ヶ原古墳の6世紀なかごろまで連続と築かれたが、5世紀なかごろ以降、これらとともに、また、6世紀後半以降はあたかもこれらと入れ替わるように営まれたのが、センターゾーン北半分から、駐車場の高台をへて、背後に残る二条の尾根上にかけて存在した石ヶ元古墳群である（図3）。この古墳群は、最大のもので径20メートル程度（6号墳）、最小ものもので10メートル程度（35号墳など）の円墳32基から構成されていた。うち、19基が、尾根上の雑木林のなかに保存されている（図3中の黒丸）。ここで注目されるのは、この古墳群の営まれた期間のながさと、副葬品の豊かな内容である。まず、前方後円墳が築造されていた5世紀なかごろに、すでにここで円墳に葬られた人々（30～36号墳）は、遺跡群内の前方後円墳に葬られたリーダーに血縁的につらなるようなひとびとであった可能性をもつとともに、この古墳群が、6世紀なかごろから後半を端緒としてさかんに営まれるようになった、いわゆる普通の群集墳（「後期群集墳」）とは異なる性格をもつものであることを示唆する。このことは、5つほどのグループを形成しながら、その後7世紀なかごろまで築造され、8世紀のはじめまで埋葬がおこなわれつづけた円墳たちから出土した豪華な副葬品からもうらづけられる。特に注目されるのは8号墳で、装飾太刀（金銅装単鳳環頭太刀）をはじめとする鉄刀、鉄矛、鉄鎌などにくわえて、

鞍金具、環鐙をふくむ馬具一式が、弓金具、多量のガラス製、その他の玉類、金製・銀製耳環などとともに出土した。鞍・鐙は、通常、それ以前には前方後円墳に葬られていたランクの人物に副葬される性質のものである。また、6号墳からは馬鈴、20号墳からは馬鐸が出土し、12号墳からは、製鉄関連鍛冶工具、1,2,6,11,28,29号墳からは鉄滓が出土している。後者は、後述する、近傍での製鉄活動に、ここに葬られたひとびとが主体的に関わっていたことの証拠となる。また、7・9号墳からは、朝鮮半島南西部でつくられた土器（「陶質土器」とよばれる）も出土している。

そこで気になるのが、正倉院文書の戸籍断簡にのこる、大宝二年（702年）筑前国嶋郡川辺里戸籍に記載された、嶋郡大領肥君猪手（たいりょう ひのきみいで）と合計124人に達するその家族と、この古墳群との関係である。川辺里の位置については諸説あるが、旧嶋郡内に所在する群集墳のなかでも、石ヶ元古墳群の内容が殊に豊かであること、石ヶ元古墳群の終末の時期が、大宝二年に確実に重複すること、また、遺跡群内の多くの谷部で、6世紀末以降、飛鳥～奈良時代に続く生活のあとが発見されており、なかでも、石ヶ元古墳群北西谷部（第12次調査）（図2）では8世紀の大規模な製鉄遺構群が、センターゾーンからイーストゾーン西端部にかけての7・18次調査地点（図2）では、飛鳥～奈良時代の鍛冶炉や製鉄炉をとまなう建物群が見つかり、7次調査地点からは「韓鉄」「嶋里」の文字がよみとれる「壬辰年」（692年か？）木簡が出土していること、これらは、遺跡群とその周囲が、郡の大領の居住地としての可能性を秘めていることを示唆している。だとすれば、日本の古代家族の構成と、その歴史の変遷研究に大きな意味をもつ肥君猪手とその家族（むろん主体はその祖先たちということになるが...）と、石ヶ元古墳群にほうむられたひとびとが、あるいは一致する可能性もあることになる。今後の研究動向が注目されるところだ。

以上のように、センターゾーンからみわたせる丘陵（ずいぶん切り刻まれ、埋め立てられてしまったが...）とその周辺には、過去のひとびとのいとなみの跡が、累々とのこされていたのである。かつてそこでは、書かれた歴史に顔をのぞかせた肥君井手のようなひと、また、それ以外のおおくのひとびとの生活と、それを通じてとりむすばれたさまざまな関係や制度が、ひとびとの喜怒哀楽とともに変遷したのだった。そこでながれた時間と、いまわれわれがここで過ごす時間とをひきくらべると、さまざまな想いがよぎる。ただ、センターゾーン造成のために破壊された石ヶ元古墳群の13基の円墳を記念するかのようにたたずむ、不思議な円錐形の芝生の造型が、その想いを少し奇妙な、ちよつと愉快なものにするかもしれない。

比文の実習室・実験室等一覧

室名	使用目的	設備・備品・図書等
情報調査室	コンピュータールーム	パソコン15台、スキャナ4台、プリンタ3台
レファレンス室	比較社会文化学院生および教員のレファレンス図書利用	レファレンス用書籍、レファレンス用書架および閲覧用テーブル
国際交流スペース	国際交流関連の情報提供・情報交換、互いの言語の学習など学生が相互に交流する場所と機会を提供することを目的とする	
語学教育実習室	語学教育・研究に関わる教員・学生が語学教育関連の授業及び実習やその準備等に用いる	テレビ、ビデオデッキ、プロジェクター、カセットレコーダー、日本語教科書、教材、絵カード等
フィールド調査室	文化人類学関連の学術雑誌閲覧、フィールド調査における言語（録音）資料や映像資料の利用	映像（カセット、CD、DVD等）再生装置、文化人類学関連の学術雑誌等
メディア・ラボ	映像メディア作品の分析、効果実験、およびそれらに関連する作業のため	100インチ・スクリーン（16:9）、フルHDプロジェクタ、各種メディア再生機器、簡易編集作業用パソコン
社会調査室	社会学・文化人類学調査研究方法論等のゼミ、社会学教員・学生の調査研究の作業室および情報・資料管理室	テレビ、DVD、液晶プロジェクター、社会調査関係図書、SPSS等対応のパソコン、PDF化対応スキャナ
哲学・政治学実習室	哲学分野、および政治学分野の教員の授業や研究会、またはその準備	哲学辞典、学術雑誌（『法政研究』、『思想』など）
地理・GIS実習室	地理学・GIS（地理情報システム）の実習・演習等に使用	パソコン（3台にArcMapをインストール）、A3版カラーレーザープリンタ、A3版スキャナ、A4版スキャナ、大型コピー機
考古人類資料クリーニング・復元室	考古学・人類学関係資料（人骨資料・考古資料）のクリーニング・復元作業	人骨資料・考古資料クリーニング、復元、計測器具、形質人類学関係レファレンス書籍類
考古人類資料処理室	考古学・人類学関係資料（人骨資料・考古資料）のクリーニング・復元作業	人骨資料・考古資料クリーニング、復元、計測器具
考古人類X線分析・マイクロ分析室	考古人類関係資料の処理、X線分析、その他の解析作業	軟X線解析装置、蛍光X線分析装置、偏光顕微鏡
考古人類画像資料室	考古人類関係画像資料・関連文献資料・書籍の保管	考古人類関係画像資料・関連文献資料・書籍
歴史学実習室	歴史学、とりわけ日本史に関する史料の取り扱い実習、およびこれに関連する研究・教育活動	国史大辞典・日本史大辞典などのレファレンスに関わる基本図書、および日本史に関する基本刊行史料、および史料保存機関の目録類など
アジア資料室	アジアの文学・歴史・政治・国際関係を分析するための基礎的資料の調査・閲覧、アジア社会講座の演習や教員・院生間の議論の場としても活用	アジア関係図書・雑誌・目録等
日本近代文学実習室	日本近代文学関係の書籍や雑誌またPCを置き、九州大学比較社会文化学院所屬の日本近代文学（日本文学との比較研究を含む）を専攻する大学院生および研究生の研究活動また学習活動（演習等）に活用	日本近代文学関係雑誌30種前後、各種事典類
生物多様性講座標本室	生物多様性講座の標本類の作製および保管、標本の顕微鏡観察	タイプ標本保管室、標本保管庫（コンパクター）、窒素ガス 燻蒸設備
生物多様性講座古代DNA実験室	亜化石試料などDNA量の少ない貴重標本からDNAを抽出して分析を行う実験室	グローブ型クリーンベンチ、冷凍冷蔵庫、PCR、冷却遠心器など
生物多様性講座RNA/クローニング実験室	RNAの抽出・cDNA合成、およびクローニングをおこなう実験室	安全キャビネット、クリーンベンチ、冷凍冷蔵庫、オートクレーブ、PCR、冷却遠心器、恒温器など
生物多様性講座解剖実験室	動物試料の解剖等の処理作業、フィールド機材の管理	大型解剖台、フィールド機材ロッカー、洗浄室
生物多様性講座生物体系学実験室1	昆虫標本試料の保管、観察、および標本作成	
生物多様性講座生物体系学実験室2	昆虫や植物体の解剖および観察など	
生物多様性講座生物体系学実験室3	昆虫標本試料の保管、観察、および標本作成、昆虫標本試料作成に使用する薬品の保管・管理	
生物多様性講座試料保管低温室	生物多様性講座の低温試料を保管する実験室	低温室（4℃）、デーフリーザー（80℃、60℃）、フリーザー（20℃）など
生物多様性講座同位体実験室	同位体用試料の調整、および炭素・窒素安定同位体の測定をおこなう実験室	ANCA-mass 質量分析機、ドラフト、クリーンベンチ、蒸留装置、遠心器、凍結乾燥機など
生物多様性講座DNA実験室	主に現生のDNA試料の調整、抽出、PCR、関連試薬の作成をおこなう実験室	安全キャビネット、クリーンベンチ、ドラフト、PCR装置、恒温器、超純水製造器、蒸留装置、オートクレーブなど
生物多様性講座シークエンス実験室	DNAのシークエンスをおこなう実験室	シークエンスシステム、カラープロッター、泳動撮影装置、大型冷却遠心器等
生物多様性講座図書セミナー室	生物多様性講座の研究に関連した雑誌・書籍の開架および閲覧	生物多様性科学関連分野の雑誌・書籍

## ○○○ 特集：新キャンパスガイド

室名	使用目的	設備・備品・図書等
生物多様性講座客員教員室	主として客員教員が利用し、学生指導を行う	
生物多様性講座生物体系学標本室1	昆虫等の標本の作製、撮影および保管	
生物多様性講座生物体系学標本室2	昆虫などの標本保管・観察や標本画像の処理など	
生物多様性講座生物体系学標本室3	学生用昆虫標本試料の保管、観察、および標本作成	
生物多様性講座飼育実験室	昆虫等の飼育実験・観察	恒温室(22℃)、恒温器
生物多様性講座野外動物行動・生態観察室	昆虫や小動物の自然状態における行動や生態の観察	屋外ケージ施設
地球科学試料処理保管室	地球科学試料の中で、容積が極めて大きく実験室内に保管が困難な試料の保管および岩石加工実験室(103)での試料の切断等を行う際の一時的な試料の前処理と保管	実験台、岩石試料
地球科学野外調査準備室	地球変動講座共通の野外調査道具・器材および野外調査用具一式の保管、野外調査用具の洗浄・乾燥・修理・保管	実験台、重量物ラック
岩石加工実験室	地球科学試料(岩石・鉱物・化石等)の切断、顕微鏡観察用の研磨片作成	大型ダイヤモンドカッター、小型ダイヤモンドカッター、自動研磨装置、岩石研磨機、偏光顕微鏡、小型冷蔵庫、岩石破断器
堆積学実験室	堆積物試料と堆積学に関する資料の保管、顕微鏡観察、堆積物試料を用いた簡単な実験の実施、堆積学に関するセミナーの実施	カソードルミネセンス顕微鏡装置、光学顕微鏡、書庫、薬品庫、マイクロドリル、滅菌機
生命地球科学実験室	生命地球科学試料(鉱物・化石・有機物等)の酸素・炭素安定同位体測定	軽元素質量分析計、純水製造装置、乾燥機、保温庫
地球変動講座標本室	比文・地球変動講座が所有する岩石・鉱物・化石標本の整理・管理、標本のデータベース化作業	岩石・鉱物・化石標本約3000点、冷蔵庫
X線・ESR実験室	主に地球科学試料(岩石・鉱物・化石等)の結晶化学的分析を行う	X線回折装置、蛍光X線分析装置、電子スピン共鳴装置
地学・生物学SEM実験室	走査型電子顕微鏡観察および大型インクジェットプリンター利用のための専用室	走査型電子顕微鏡、大型インクジェットプリンター
岩石学実験室	地球科学試料(岩石・鉱物等)について、溶融実験および化学分析前処理を行う	ドラフトチャンバー、ビードサンプラー溶融装置、雰田気制御炉、純水製造装置、精密分析天秤、高温電気炉、恒温乾燥炉
X線マイクロアナライザー実験室	地球科学試料(岩石・鉱物等)について、微小領域化学分析を行う	マイクロアナライザー、カーボンコーター、ダイヤモンドポリッシャー、自動制御デシケーター
化学実験室	天然の水試料の化学分析実験	イオンクロマトグラフ(陽イオン用、陰イオン用)、オートサンプラー
質量ガス分析室	天然の気体試料の化学・質量分析実験	ガスクロマトグラフ(無機ガス用、有機ガス用)、超音波洗浄器、上皿電子天秤
地史学実験室	軟堆積物の固化と切片作成、軟堆積物・水試料の分析と観察、微生物試料の顕微鏡観察	ドラフト、冷凍ミクロトーム、マイクロ電極計測装置、恒温機、蛍光顕微鏡
古生物学実験室	学生の古生物学および古気候学の研究	
岩石粉碎実験室	地球科学試料(岩石・鉱物)の洗浄・乾燥・粉碎・細粉処理	超音波洗浄器、恒温乾燥機、タングステンカーバイド製高速振動試料粉碎器、タングステンカーバイド製ミキサー粉碎器、ステンレス製スタンブ粉碎机、メノウ製モルターグラインダー、タングステンカーバイド製乳鉢、ステンレス製乳鉢
鉱物合成実験室	鉱物の合成実験を行う	水熱鉱物合成装置、高温鉱物合成装置
原子間力顕微鏡実験室	原子間力顕微鏡実験のための専用室	原子間力顕微鏡(MM-SPM, D3000)
粘土鉱物学実験室	粘土鉱物およびそれに関する試料の処理・調整	恒温乾燥機、遠心分離器、超音波洗浄器、小型冷蔵庫、局所排気装置
古地磁気実験室	岩石試料・堆積物試料の古地磁気測定	スピナー磁力計(リングコアセンサー型)、岩石磁気交流消磁装置(タンブラー型)、熱消磁炉、フラックスゲート磁力計
岩石磁気実験室	岩石試料・堆積物試料の岩石磁気実験	初磁化率計、スピナー磁力計(ショーンステッド社製)、岩石磁気交流消磁装置(3軸型)、ガウスメーター
ラマン分光実験室	地球科学試料(岩石・鉱物・化石等)について、微細・極微細領域の組織観察および構成物質の相同定を行う	顕微レーザーラマン分光分析装置、冷却水循環装置、偏光顕微鏡、実体顕微鏡、デジタル顕微鏡撮影装置、データ処理コンピュータ
環境微量元素分析室	天然試料(水、植物、堆積物等)の環境汚染指標元素の微量分析実験	水銀分析装置、電気炉、偏光顕微鏡、電子天秤
真空実験室	真空装置内での天然の気体試料の分離や堆積物や水試料の分解発生気体の分離・純化実験	自作のガラス製真空ライン装置、電気炉、電子天秤

## 博士後期課程に編入学して

田村 美香

(国際社会文化専攻)

21世紀に入り、グローバル化が進み、世界の枠組みは変容している。人、モノ、資本が国境を越えて移動し、高度で、複雑な社会の到来だ。画一性よりも多様性を重んじる傾向は、島国である日本においてもあらゆる分野で見られる。この広報誌のタイトルとなっているクロスオーバー(いろいろな「世界」にまたがるものを許容する)という言葉は、そういった現代社会の性質をよく捉えていると思う。そして、私はそのクロスオーバーを肌で感じ、その恩恵を受けている一人だといえよう。

現在、私は、工学研究院でテクニカルスタッフという身分で働きながら博士後期課程の院生として比較社会文化学府(比文)にも在籍している。名古屋の大学院で修士課程を修了し、1年のブランク後、進学を決意したのは、職場環境や職務経験から受けた影響によるものが大きい。勤めている本学のグローバルCOE拠点のひとつ「未来分子システム科学」では、工学府、理学府、システム生命科学府、統合新領域学府(オートモティブ専攻)で学ぶ博士後期課程の院生がコース生として所属しており、私は、ここで英語教育を中心に、教務アシスタントを担当している。関係する教員、研究者は、世界を相手に日々戦っているという意識が強い。それは、院生からも感じられることである。海外の大学とも年間数回合同シンポを行い、教員間だけでなく、院生同士の研究交流も促進している。毎年ノーベル賞受賞者も含めて、世界各国から著名な外国人の研究者、外国の大学で教鞭をとっている日本人研究者が招聘され、特別講義やワークショップなどを行っており、ボーダレスな科学のコミュニティー(共同体)の縮図を垣間見ることができる。そこでの共通言語はもちろん英語だ。この拠点では、女性の研究者を積極的に雇用しており、私は仕事の一環で、彼女らにインタビューをする機会がある。家事、子育てをしながら男性社会といえる理工系の世界で切磋琢磨する彼女らの存在が、背中を押されるきっかけとなった。研究テーマである理工系の研究者のための英語教育と女性科学者のキャリア構築への強い関心は、このような日常から自然とわきあがったものである。

私が比文への編入学を志望した理由として、まず、比文が学際的アプローチをとっていることがある。博士課程と

もなると極めて専門的な内容を深く突き詰めていくため、視野も狭くなりがちだが、比文では様々な分野の研究をしている教員、院生がいるため、その心配が少ない。私が研究指導を受けている異文化コミュニケーション講座は、教員もドイツ人、日本人、韓国人と国際色豊かだが、院生も日本人以外に、中国人、韓国人、フランス人、アラブ人と多国籍である。研究テーマも多岐にわたり、それぞれの研究の進捗を発表し、議論しあうゼミは、研究を進める上で、たくさんのヒントを与えてくれる貴重な時間となっている。比文のもう一つの利点は、地理的な利便性である。私は、社会人院生ではあるが、比較社会文化・言語文化研究教育棟が職場から目と鼻の先にあり、自宅からも近いという、これ以上ない理想的な環境におかれている。社会人院生という、仕事を持ちながら片手間に研究をする「二足のわらじ」という印象があるが、私はそのような困難を感じずにいられている。学生という別の顔を持つことで、むしろ世界を広げることができ、解放感さえ覚えている。とはいうものの、博士論文を書き上げるのは、時間、知力、体力とエネルギーを要する長くてつらい道のりとなるだろう。私は気負い過ぎずに、今の与えられた環境で、社会人と院生のクロスオーバーを楽しみながら研究したいと感じている。



エルゼビア社と共催の科学論文執筆セミナーにて(前列右から2番目)



# 国際生命倫理ディベート大会に参加して

木下 博 公

(国際社会文化専攻)

私は、中学から英語を本格的に習い始めて以来地道に英語の勉強を続けています。これまで大学院での講義、アメリカへの交換留学・インターネットなど様々な機会を見つけては出来る限り英語を話してきました。インターネットのおかげで英語でカジュアルな話をする機会は日常生活の中でも持てますし、アカデミックな英語も講義や研究の中で接することも出来ます。しかしディベートという独特な形式の中で英語を駆使することは日常生活の中ではまずありません。そんな中、講義を一緒に受けていた学生から、当時言語文化院に在籍されていた鎌田裕文先生（比文学府出身、現・九州大学総合理工学研究院講師）が指導されていた英語でのディベートの練習会に誘われました。これは英語での討論や議論の練習にとって良い機会になると思い、練習会に参加しました。それが今回のディベート大会への参加へとつながった次第です。大学院の講義で井上奈良彦教授のディベートのクラスを受講したことがありましたのでディベートについて概論的な知識はありましたが、実際にディベート大会を体験するのは今回が初めてでした。

ディベートというのは日本語で言う自由討論・ディスカッションとは違います。討論者は論題の肯定側と否定側に分かれ、それぞれの立場を論証していかなければなりません。例えば、論題に対して個人的には肯定的な意見をもっていても、自分が否定側に回ったときは論題を否定する意見を述べなければなりません。つまり肯定・否定どちらの役割も意図的に演じ・論じていくロール・プレイ（役割演技）というところが一般的な討論とは違うのです。このロールプレイを通じて論題に対してより広い視野や柔軟な考え方を獲得出来るのがディベートの醍醐味の一つです。通常のディスカッションでは自分の意見や見解をサポートする意見や証拠のみを人間は探しがちですが、ディベートという条件のもとではあえて自分の個人的な意見とは反対の論証もしなければなりません。

最初はこのやり方に戸惑いましたが、練習を重ねていくごとに次第になれてきました。これは一種のゲームであり自分の個人的な意見を正当化することが目的ではない、与えられた役割をいかに説得力を持って論じていくか、相手の意見に如何に屈しないで自分の役割をまっとうしていか

とすることが重要だということに気づいてきました。自分の与えられた役割に対してある種の気概を持って演じ論じていく訓練にもなったと思います。しかしながら、気概だけでは勝負に勝てないのも事実です。ディベートに勝つためには情報や証拠を編成する力と表現力そして戦略が必要なのです。

今回の生命倫理ディベート大会は米国の大学で多く行われている Policy Debate の形式で行われました。これはイギリスや英連邦諸国で広く行われている即興性の高い Parliamentary Debate とは違いディベートの試合の数週間～数ヶ月前に論題が発表され、その論題に対する十分なりサーチそして証拠資料（evidence）の明示が勝敗を大きく左右します。つまり例え表現力では勝っていても証拠となる資料を明示しないと勝てないのです。ここにこのスタイルのディベートの難しさがありますが、討論者は証拠資料を集める段階で論題に対する様々な情報や資料に接することになります。今大会はトーナメント式の大会でしたので討論者は肯定・否定の立場で最低一回ずつ論題に対してディベートをしなければなりません。つまり討論者は肯定・否定の論証・根拠となる証拠を事前に充分にサーチしなければなりません。そしてこの過程で討論者は論題に対するより柔軟な見方や見解を身に着けることになるのです。例え試合には勝てなくてもここで身に着けた柔軟な考え方や見解は討論者の大きな財産として頭の中に残ります。

今回は論題が安楽死という重く深刻な論題でした。しかし生と死は人間皆に平等に起こりますし誰もが避けては通れません。筆者自身も2年前に父を亡くしその時の状況を思い出し論題に対して考えることがつらい時もありましたが、現在は安楽死というものに対して中立的な考えを持つようになりました。それは肯定的・否定的な様々な事例を知った後でどちらか一方の立場だけで考えることが出来なくなったという事です。例えば、ある事例では安楽死はうまく機能して患者も家族も満足していると述べられていますが、別の事例では安楽死という名目で人員整理的に人の命が扱われている、また安楽死の処置が失敗することもあると報告されているのです。どちらか一方だけが真実でど

ちらかが間違いということもないでしょう。おそらく両方が実際に起こっていることなのです。このようにディベートを通じて現実に起こっていることについて極めて多面的な見方が出来るようになり論題を俯瞰（ふかん）する視点を得られるのです。

今回のディベート大会では、一週間前にアメリカ、中国、台湾、タイ、ネパールなど各国から参加者が来日しディベートに関する五日間のワークショップを受講してから大会に臨む形式がとられました。ワークショップを担当するのは米国イリノイ大学のZompetti博士でディベートの指導で世界的に有名であると共に「マジックにおけるコミュニケーション」を研究しておられる教授です。ハード・スケジュールの中で熱心に指導されていました。

ワークショップの初日はディベートの基本概要の説明や二人一組で単純な論題のディベートを即興でやるという練習がありました。その場で渡される論題には「窓とドアはどちらがいいか？」など笑える内容の論題もあり初日の緊張がほぐれていきました。その後、夕方からは歓迎パーティーが開かれ今回のディベート参加者たちと話す機会が得られました。海外からの参加者は英語が流暢でディベートの経験が豊富な学生でした。また他大学で医学や薬学を学んでいる学生の参加もあり、このような出会いは九大という枠を超えた国際ディベートに参加したからこそ実現できたものです。九大内部からも学部や学府を越えての参加者があり、様々な人との出会いがありました。2日目は議論の構成の仕方やブレイン・ストーミング、PCルームを使って討論をサポートする証拠資料収集。3日目はスピーチのやり方、議論構成法、ブレイン・ストーミングと証拠資料収集。午後からは大宰府とシーサイド百道の二手に分かれて観光を楽しみました。4日目は反論・反駁（refutation & rebuttal）と判定（judging）についての講義と証拠資料収集リサーチに時間を費やしました。リサーチの時間、インターネットからの情報のみならず医学部の方から医者がどのような観点から患者をみているのかなどを個人的に教えてもらうことも出来非常に参考になりました。今回の大会では各国から来るディベートの専門科の教授陣に加え参加者も判定に加わりましたのでjudgingの方法についての講義は重要な意味を持っていました。また判定のやり方を知ることにより大会参加者が自分のディベートをより有利に展開することが出来るようになる効用もありました。それに加えて、自分が他のチームの判定に参加するとなると自ずと真剣に判定について学ぶようになるのでその点でも参加者が判定者を兼ねることは有意義であったと思います。5日目は終日実際の大会と同じ形式で各チームがディベートを行

い、教員からコメントをしてもらうディベート本番に向けてのリハーサルとも言える内容の活動が終日行われ、各チームのディベートの内容と進め方について専門的なアドバイスをしていただけました。この日までには大会で九大の教員、参加者とともに判定を担当するためにディベートのスペシャリストの教授陣も数カ国から福岡に到着して本番へ向けての気持ちが高まっていきました。

そして3月14日いよいよディベート大会当日、1月の後半からの練習会、鎌田先生の主催されている「福岡ディベート研究会」でのディベート、一週間のワークショップを通じて学んだことの結果が今日すべて出てしまうと思うと緊張と不安と期待が胸に渦巻きます。筆者のチームはパートナーの努力のおかげで論旨をサポートするのに重要な情報収集が順調に進んでいた点では安心してディベートに望むことが出来ましたが、各国チームのディベート能力・英語運用能力の高さを考えると尻込みするような感覚を感じました。しかし実際にディベートが始まるとアドレナリンが大量に放出されたのか集中力が高まりある種の恍惚感を感じました。このあたりはスポーツの試合とも似ているかも知れません。

大会は米国・中国混合チームの優勝となり終了しました。筆者は準決勝の判定も担当したのですが、準決勝まで進んだチームは論証編成力・表現力とも優勝チームと負けず劣らずのレベルで勝敗をつけるのが非常に困難でした。大会後のお別れパーティーでは一週間ともに学び戦った参加者たちや判定者や指導者として参加された九大や他大学の教員およびこの大会のために各国から来日された教授陣と交流を深めることが出来ました。今年と昨年の大会の様子はウェブ上で見る事が出来ます。興味のある方は一度ご覧になってみてください。

(<http://www.flc.kyushu-u.ac.jp/~inouen/bioethics/>)



ディベート大会終了後の記念撮影

## “台湾の魯迅”頼和の文学に導かれて—国立彰化師範大学滞在記—

秋吉 收<sup>しゅう</sup>  
(国際言語文化講座)

2008年10月から2009年1月末まで、台湾政府の招聘により、台湾中部の彰化市に位置する国立彰化師範大学(中国文学系及び台湾文学研究所)の客員副教授として赴任する機会を与えて頂きました。彰化師範大学はいわゆる教育学部に加えて、私の所属した文学部、それに経済学部、理学部、工学部等、更にそれぞれの大学院を擁する中堅の総合大学です。



彰化師範大学校内

彰化市は清朝時代に大陸の福建省との貿易で繁栄した鹿港への集散地として台湾で最も早く開かれた地域です。寺廟など貴重な歴史的建造物や遺跡も多く、また文学者や多くの著名な知識人を輩出した文化的息吹に溢れた土地柄でもあります。またそうした意識の高さから、日清戦争後に台湾が清朝から日本に割譲された当時、日本の植民地統治に最も激しく抵抗した地域としても歴史に刻み付けられています。

私が初めて彰化市を訪れたのは2003年のことでした。「植民地台湾を描く視点—佐藤春夫『霧社』と頼和「南国哀歌」(2004)などの論文執筆を準備していた私は、近代台湾を代表する作家、“台湾の魯迅”と称される頼和<sup>1</sup>の故郷、彰化を一度見ておきたいと考えました。その後2007年には彰化にて開催された国際学会の招きで「臺灣的魯迅」頼和與大陸

<sup>1</sup> 頼和(1894-1943) 台湾総督府医学校卒業、嘉義医院、廈門の博愛医院勤務の後、彰化で頼和医院を開業。医業の傍ら創作の筆をとり、同時に反日民族運動に参加した。日本官憲により獄中生活を余儀なくされ、終戦間近の1943年病没。

新文學的關係」と題する小論も発表することができ、研究を通して次第に台湾のそして彰化の知人も増えていきました。



頼和胸像(彰化市の頼和記念館)

さて、彰化師範大学で講義を担当したのは主に中国文学及び台湾文学専攻の大学院生対象の授業です。「魯迅專題研究」「中日近代文學比較專題研究」等の題目で、中国近代文学の成立から代表的作家紹介、また与謝野晶子や芥川龍之介ら日本作家が中国で如何に受容されたかといった話題を主に取り上げました。同時に、日本における中国、台湾研究の歴史と現状についてもできるだけ多く紹介するように務めました。



授業を行った中国文学系の講義室

日本語を一切解さない相手に対して講義するのなかなか難儀でしたが、私の専門とする近代は日本・中国・台湾

が複雑に交錯した時代であり、歴史的・政治的な立場、視点の相違にはやはり気を遣いました。しかし年若い学生達は恬淡としたもので、時に発される私の“KY”トークも笑顔で受け流す大人ぶりです。国立の師範大学という性格もあってか、学生達は至って真面目でそしてとても優秀でした。授業の上で何度か課したレポートの内容は、創造性に富んだ、そのまま論文として発表できそうなレベルに達するものさえ散見され、近現代中国研究後進国との私の台湾に対する先入観はすぐに打ちのめされることになりました。



学生達と(台中三越内映画館前)

また、他大学や海外から著名な研究者を招いての講演会が隔週で開催されるなど、活発な学術交流が展開されています。各図書館や研究機関相互のオンライン利用による資料複写、貸与もとても便利で、また大陸中国の本も自由に買うことができ、10年ほど前と比べてもまさに隔世の感があります。私でも稀少な外国人として大事にされたのですが、日本のことは何でもわかるだろうとばかりに、茶道華道など日本の伝統芸能や古来の玩具などを説明紹介しると依頼されたりして、日台友好にもいささか貢献しました。

さて、21世紀に入り、国民党から台湾土着の民進党へと政権が交替したことで、台湾は大きく変わりました。総統の陳水扁が、国民党統治の象徴たる蒋介石（の偶像）を排除する政策を次々と打ち出したことや、「台湾」の復権を図ったことで台湾に住む人々の意識も大きく変わりました。「中華」郵政は「台湾」郵政へと改名し、また台湾全土で台湾語<sup>2</sup>の使用範囲が明らかに広がり、こうした陳水扁の一連の政策の一方で大陸中国との関係が悪化していきました。しかし再び国民党が政権奪回、2009年5月には馬英九が総統に就任し、現在「台湾」から「中華」へ大陸寄りの方針へと大きく舵を切っているのも周知の通りです。

<sup>2</sup>「閩南語」とも。福建方言を起源とする。このほか、大陸から国民党が渡ってきて強制した北京語に、客家語、各高山族の言葉など、言語体系は複雑である。



現・台湾民主公園広場に立つ牌楼。蒋介石の字を配した「大中至正」を改めた「自由廣場」の文字が見える

私が台湾に来て一ヶ月余り、11月12日にかの陳水扁元総統が在職中の汚職の嫌疑で逮捕されました。総統経験者初の逮捕事件ということで、連日の報道はいやはや凄まじいものでした。妻子を始めとする親類縁者が賄賂や利権にたかるその構造はよくある権力者の末路でしたが、台湾土着の政権たる民進党から初めて輩出した総統、陳水扁に対する人々の想い、それは戦後大陸から渡ってきた国民党統治に対する抜きたい感情と一体のものでした。外国人である私に対して多くの人が熱く語りかけたその表情は今でも忘れられません。



今も残る日本家屋。嘉義にて

ところで、台湾は日本に対して極めて友好的な土地だとよく言われますが、車や電化製品を始めとして、お菓子や日用雑貨まで日本製品が溢れ、加えて日本のアイドル・俳優のCDからポスターまで、町では日本が跋扈しています。テレビコマーシャルでは、「いま日本で最も人気のある製品」（日本で見たこともない商品も多いのですが・・・）などのコピーがひっきりなしに流れ、台湾の人が日本に対して敬意にも近い親しみの気持ちを持っていることが伝わってきます。台湾と同じアジアの同じ島国である小国の日本が、そ

## ○○○ 海外レポート

の技術力によって世界に冠たる経済大国に成長したサクセスストーリーを、台湾の人は誇りに思ってくれているのです。

こうした状況を瞥見し、台湾の人が心から日本を愛してくれている、大切に想ってくれていると、良い気分になる日本人は多いことでしょう。実際、過去の日本の植民地支配すら台湾の人は歓迎し認めているのだと主張して憚らない言説が横行していることも事実です。台湾の屋台で買ったおでんに舌鼓を打ちながら、日本文化の氾濫する台湾の町を散策し、さらには日本語を流暢に操る、日本鼻根のあるいは日本に商品価値を認める台湾の人たちと“熱く”交流するだけでは、真実が見えてこないのも仕方ないことと思います。



懐かしい味覚との出会い「菱の実」

しかし4ヶ月間もそこで働き生活していれば、ぬるま湯にばかり浸かっているわけにはいきません。日本の植民地支配を快く感じている台湾人など一人もいないことが次第にわかってきます。一つだけ実例を挙げてみましょう。何度か訪れた「黒公鶏」という鳥料理屋さんのご主人は、私にヒノキの話をされました。最高峰玉山を始めとする三千から四千メートル級の高山を頂く台湾の深い森林には豊かなヒノキの原生林が茂っていましたが、それに目を付けたのが他にもない日本人でした。植民地統治時代にはその多くが伐採されて日本に運ばれます。明治神宮にある日本最大の木造「大鳥居」が、台湾ヒノキで造られた<sup>3</sup>ものであることなど迂愚な私は全く知りませんでした。「黒公鶏」のご主人は更に続けます。“律儀な”日本人は、ヒノキを伐採した後に裸山にさせないようにきちんと代替りの苗木を植えたん

<sup>3</sup>大鳥居傍らの説明板に“原木は台湾丹大山の樹齢1500年に及ぶヒノキ”との記述がある。経緯については無論触れられていないが。

だよ。だがね、それは成長の早い極めて安価な木だった…。現在台湾では貴重な森林資源保護のためヒノキの伐採は法律で一切禁止されています。日本が奪った多くの人、物、心を台湾の人々はその眼に焼き付けているのです。私には返す言葉は見つかりませんでした。

またある台湾の同僚は、日本が去った後にやって来た国民党は日本が残した建造物や社会資本をことごとく接収すると同時に、ヒノキの伐採を含む搾取をもそのまま受け継ぎ、日本に優るとも劣らない“掠奪”を行ったとも語りました。何のことはない、日本への怨恨の念はその後にやって来た災厄によって薄められただけだったのです。

今回の滞在を通して、台湾の知人は本当に良くしてくれました。新暦1月1日のお正月に、寂しいだろうと私を台北のご自宅に招待され、超高層ビル・台北101の花火大会に連れて行って下さったり、私の探す資料を遠くの大学図書館からわざわざコピーして持ってきて下さったり、それらはすべて心からの笑顔でなされました。私はそこに日本人とは異なる民族性といったものを認めました。10年にも及ぶ日本留学経験をもつ友人が、以前こう話したのを憶えています。「台湾の人が遊びに来てと言った時は、本気で言っているから行ってもいいんだよ」と。彼は、日本人の“優しさ”には裏表があることを実感として学んでいたのです。日本が、周辺諸国と近くて遠い国にならぬよう、常に真実を見抜く目を持ちたいものです。

お世話になったすべての方々へ。謝謝！



台湾東部の清水断崖。滞在中出会った最も美しい景観でした

## 明星大学に就職して

趙 海 城

(明星大学)

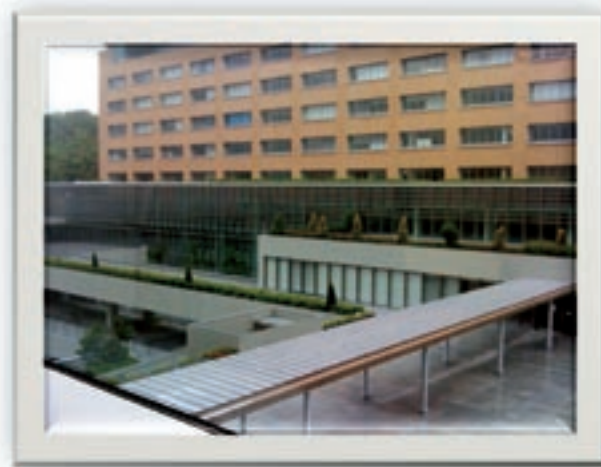
今年の3月に比較社会文化学府日本社会文化専攻博士後期課程を満期退学し、4月に東京日野市にある明星大学人文学部に赴任しました。一般教育の中国語教員として、現代中国語、中国事情、中国文化と文学などの授業を担当しております。ちなみに、この「明星」は「メイセイ」と読み、詩歌雑誌「みょうじょう」と関係はありませんが、中国語では“トップスター”の意味で、なかなか響きがいいです。

六本松、福岡を離れてあっという間に2カ月経ちました。家族はまだ福岡にいることもあって、わたくし自身はまだ比較社会文化学府の学生であるような錯覚さえ覚えます。そんなある日、「新しい出発」の原稿依頼が来ました。それはいわば「お前はもう九州大学を離れたんだ」と実感させることでもあった。新しい出発ということで、まず今の勤め先のご紹介と自分の職務内容のご紹介をさせていただきます。

明星大学とは東京オリンピックが開催された1964年に開校された大学で、全国的に知名度は高いとは言えませんが、規模的には590ぐらいある私立大学の中で10%以内に入る組織で、今私のいる日野キャンパスには約8,000名の学生が勉強しています。そのうち中国語履修者は今年約600名ぐらいです。わたくしの担当する業務内容は主に彼らに対する中国語教育を行い、中国文化・中国事情を紹介することです。

中国は国策的戦略として中国語の全世界普及政策を推進し、2005年以降今日まで世界各地に約350校もの孔子学院を設立している。こういう外の動きとは対照的に、日本国内において、大学のカリキュラムから外国語科目の中国語（英語以外の言語もそうだと思う）の授業が削られ、大学生の中国語履修者が減少する傾向にあると言われていました。そういう流れを反映しているかのように、明星大学日野キャンパスでの中国語学習者数も3年前より20%も減少しています。また、日本のマスメディアに大々的に取り上げられる中国に関するマイナス報道の影響もあり、親が安心して送り出せないため、短期留学希望者も減っているようです。これでは若者がこの身で中国を体験するチャンスさえ奪われてしまいます。ゆくゆくは中国に対する歪んだ理解を持ったまま社会に出ることになりかねません。以上私の仕事と関係のなさそうな駄文でしたが、他の常勤講

師、非常勤講師を含めた横の連携を取りながら、如何にすればこういう現状を打破し、少しでもよい方向に向かわせるかも私の仕事の重要な一部分であります。



研究室の窓外風景

私の専門は日本語教育ですが、何の縁か分かりませんが、大学時代から何らかの形で日本人に対する中国語教育に関わってきました。学部時代の留学生に対する個人レッスン、日本語教員になってからも大学のサマーコースや日系企業の社員などに中国語教育を行ってきました。日本に留学して、国際交流協会や大学などで中国語教育に携わってきました。考えてみれば、それらの経験はすべて今の仕事のための蓄積だったかもしれません。

毎日授業及びその準備、会議や事務的仕事はもちろん、今は共同で中国語教材を編集し、来年の初めに2冊ぐらい出版する予定です。また、大学院時代から日中21世紀翻訳会に関わらせていただき、中国の著名な作家周而復氏の370万字にもなる小説『長城万里図』（現代版の『戦争と平和』と称される）を共同で翻訳しております。全6巻13冊中、4巻までの8冊はすでに出版されており、私が主に関わっている第5巻9、10冊目の翻訳も一応済み、今は校正段階に入っており、年末までに10冊目を世に送り出す予定です。中国語教育に関する研究として、今中国語検定協会の実施された検定試験の結果を分析し、産出文から日本人中国語学習者の誤用原因、習得状況の分析・考察を進めております。

## ○○○ 新しい出発

ほぼ毎日夜10時半まで研究室に閉じこもって作業をしています。

以上仕事内容である中国語教育関連のことを述べてきました。教師という仕事について以上、教育と研究の両輪で前に進めなければなりません。これについてはよく分かっているつもりではありますが、肝心な自分の研究、大学院時代からのテーマである「日本語の連体修飾構造における動詞のテンス・アスペクト」の研究をなかなか集中して進める時間が取れていません。

中国から留学に来る際、前に勤めていた大学の姉妹校である福岡教育大学に研究生として入学しました。しかし、研究生時代の指導教官に「趙君、もし将来大学教員の仕事を続けたければ、今のうちに博士課程を持つ大学に進学し、博士号をとったほうがいいよ」と勧められ、比較社会文化学府に進学しました。研究生として指導も受けずに直接入試を受けた私を、比較社会文化学府は受け入れてくれました。今振り返ってみると、比較社会文化学府に在籍していた6年間、松村瑞子先生をはじめ、因京子先生、山村ひろみ先生、板橋義三先生のような研究者として、また教育者としていいお手本となるような先生方に恵まれたことは私にとっての最大の幸運であり、生涯の富でもあります。指導教官の松村先生は私のような不出来な教え子に対しても決して怒ることなく、いつも忍耐強く、励ましつづけてくださいました。研究だけでなく、生活の面においても、良き師としていつも相談に乗っていただきました。しかし、それにお応えすることができずに、九州大学を離れてしまいました。

学生時代より、忙しい日々を送っておりますが、無駄な努力はなしと信じ、九州大学比較社会文化学府のOBとして、大学院時代に身につけた知識、習得した研究方法を糧にして、これから教育にも、自分の研究にも一層力を入れて頑張っていきたい所存でございます。特に一日も早く論文を仕上げ、博士学位を取得したいと存じております。

後輩の皆さんは素晴らしい研究環境を持つ伊都キャンパスで研究生生活を送ることができることを羨ましく思います。

多くの方にとって、通学時間が長くなるかもしれませんが、よく学校に行き、よく指導教官と相談し、よく情報調査室を利用してください。

学府の院生数の40%近く占める留学生の皆さんは日々異文化の中で生活しているわけでありますから、話し方や身振りや思考方法など、なんでもないようなことでもその根底には考えの違い、文化の違いが潜んでいるかもしれません。また、人生そのものは体験ですので、時間が許されるかぎり、小中高等学校訪問や各種のイベントに積極的に参加してみてください。そういった違いについてよく考えること、いろいろ体験することは短い留学期間を終えて帰国したら、皆さんの良き思い出になると存じます。

また、常に相手の立場に立って物事を考え、思いやりのある人間として、誠実に、まじめに、まっすぐ生きてください。それが研究者である前に一社会個体としての基本であり、社会組織の中で他と共存する基本でもあります。



台湾大葉大学にて研究発表

## 九州産業大学の専任講師となって

吉原 弘道

(九州産業大学)

今年の4月から九州産業大学の国際文化学部（日本文化学科）に専任講師として勤務することになりました。九州産業大学では、2004年4月から非常勤講師として国際文化学部の専門科目を中心に講義してきました。非常勤暮らしは、福岡大学や西南学院大学を含めると通算十年近くになります。講義については長い非常勤の経験がありますが、教授会など初めて経験することも多く日々勉強の毎日です。特に、大学の仕組み・運営など、非常勤時代には全く考えたことがなかったことも、専任講師となりいろいろと考えさせられています。

九州大学大学院比較社会文化研究科（現：九州大学大学院比較社会文化学府）では、博士後期課程から服部英雄先生の研究室に在籍していました。研究テーマは、服部先生の「幅広い分野への興味・関心を持つように」とのアドバイスを受け、修士課程までの「南北朝時代の政治・制度」から「中世文書論」という新しい課題に取り組み、肥前国の松浦党関係文書を素材として「中世文書の伝来過程」について研究しました。

その成果は、地域資料叢書3『青方文書の研究』（服部英雄研究室、1999年）として刊行していただきました。地域資料叢書は、大学院生の研究成果を発表するために服部先生が企画されたもので、現在も刊行され続けています。『青方文書の研究』も、服部先生のご尽力と印刷所のご協力により刊行することができました。

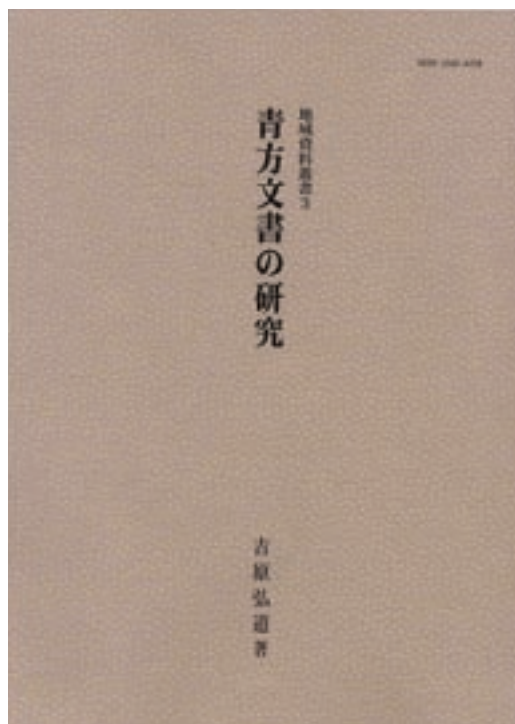
「青方文書」は、肥前国宇野御厨浦部島（現在の長崎県新上五島町）の青方家に伝来した中世～近世までの質・量ともにすぐれた文書群であり、調査した時点では長崎県立長崎図書館に収蔵されていました（現在は長崎歴史文化博物館に収蔵）。『青方文書の研究』の執筆のため、高速バスに乗って何度も長崎に通い原本調査を行いました。長崎図書館の職員の方々に大変お世話になったことを思い出します。

『青方文書の研究』では、青方文書が花押のあるものも含めてほとんどが案文であるとの通説に対して、花押のある青方文書は基本的に正文として取り扱うべきであるとの結論を得ました。これにより、青方文書の史料的な価値が高まり、2001年2月に青方文書が長崎県指定有形文化財に認定されました。

また、文書を「かたまり」として見る視点が文書論の研究で指摘されていますが、これを青方文書にも適用して、中世から現在までの伝来過程を段階的に整理して文書群全体の集積過程を明らかにしました。その結果、従来家文書として一括して取り扱われてきた青方文書が、実は青方氏と白魚氏の二氏が個別に集積した文書群の集合体だったことが判明しました。

その後、『青方文書の研究』に新たな研究を付加して「中世文書の伝来過程の史料学的研究」として研究を集約させ、現在は「中世社会における贈答・流通」について刀剣の贈答という視点から研究を続けています。

服部先生の「幅広い分野への興味・関心を持つように」とのアドバイスは、自らの研究に深みを持たせるだけでなく、大学教育でも役立っています。現在大学では基礎教養科目を中心に講義しており、学生に歴史への関心を持たせ、基礎的な知識が習得できるように工夫しています。そして、日本史教育を通して、自ら情報を集め自分で考えて判断できる人物を育てていきたいと思っています。





# 博士論文を書き終えて

網野 薫 菊

(日本社会文化専攻)

平成21年3月24日、多くの先生方のサポートや、運にも恵まれて、私は無事博士論文を書き終え、めでたく博士課程を修了することができた。

比較社会文化学府の門を叩いてから、足かけ5年の道のりであった。修士2年、そして博士3年で修了へ漕ぎつけたことを考えると、スムーズな取得であったように思われるだろう。

しかし、比文の入学を思い立った時に私はすでに29歳であったことを考えると、この5年という期間は私にとって決して短いものではなかった。

博士論文を書き終え、修了してから数カ月たった現在、生来のあまのじゃくな性格のせい、また現在よく取り上げられる余剰博士問題という社会問題のせい、まだ職探し中といった状態である。

そのことを考え合わせると、私は全ての人に大学院が素晴らしいもので、オススメできるものであるとは考えていない。特に漠然と、何か勉強さえすれば安定した仕事を得られるだろうと考えている人には、現在のシステム下の大学院はあまり機能するものではないと思う。

それを実感している現在、それでも私が大学院に通い、学問を志し、そして博士号を取得したことからは発生する「メリット」を考えてみたいと思う。

マスコミではしばしばポストクワン問題と言われる問題が取り上げられている。すなわち、博士号が依然より取りやすい状況になり、博士が毎年輩出されるようになった。しかし、少子高齢化に伴う学部への出願者数減少のために、国内の大学において博士が専任教員として雇用される機会は今後増える見込みはない。そのため1つのポストに多数の博士が応募する状況となり、その競争からあぶれた博士はある程度の期間、(もしくは継続的に)非常勤講師などの非正規雇用者として働かなくては行けない。そういった身分の不安定な博士はあまり喜ばれず、正社員として働く学部卒のほうがよっぽど良いといったことである。自分が心血を注いで行ってきた研究やそれに伴う知識をどうしても生かそうとするならば、かなりの数の博士が不安定な身分に甘んじなければならないことになる。残念ながらこれは事実であり現実である。

実は、博士論文を書き終えるまでは私は唯よりよい博士論文、そしてより研究者として通用するものを創ることしか考えていなかった。そのため博士取得後は、すぐに安定した研究職の雇用がないことに関して、世間の見方に同調して、怒ったりした。

しかし、よくよく考えてみると私は5年前、比文を志した時、月給4万円の29歳の日本語教師であった。

比文に入ることができなければ、私は日本語教師として細々と、また転々と勤務を続け、月給13万の専任教師になれたかもしれない。

私が出た時欲しかったのは、なんだったのか。まず日本語教育の勉強を通して興味を持った「言語学」を趣味でやるとしてもこのままではアマチュアとしてしか認められない。ちゃんとした学問機関で学びアマチュアと呼ばれないようにしたかった。

さらに、漠然とした自分の世界を変えたい、そして広げたいという「可能性」への渴望、私はこんなものじゃない、まだやれる、自分がどこまでやれるのか試したい、とも考えていた。

そもそも先に見える人生が嫌なタイプだった私が欲したのは、決して「正規雇用」でも「安定した身分」でもなかったと思う。学問というロマンと漠然とした自分の人生の可能性だったと思う。

それなのに博士号を得た今、世間の論調と同調して不満を叫ぶのは自分でも少しおかしな気がする。

この5年間で私は変わった。私は5年前の自分を「原始人」みたいなものだと感じる。そして様々な経験や学問、研究を通して、「原始人」だった自分が、やっと「現代人」になれた気がする。

大学院生活で最大の実りと言えるものは、博士課程在学中に、ミシガン大学へ交換留学生として留学できたことである。

日本語教師というのは、そもそも国際志向を持つ人間に魅力のある職種である。私はかねてから留学したいと思っていたが、なかなか機会に恵まれず、国外に長期間滞在したことはなかった。

しかし「交換留学生」という一番軋轢の少ない形で、米国のステイトアイビーに留学できた。これは日本語教師をしていたのでは、手に入れられるものではなかったと思う。また私の能力から考えても、大学院生という身分でなければ他の学部生と競合できたとも思えない。

ミシガン大学では、各国からの留学生と仲良くなる機会にも恵まれた。彼女たちは自律的、論理的かつしっかりとした向学心を持っており、人格的な面でも彼女たちと仲良くなることで、私は今までにないロールモデルを得た。帰国後、私は性格がよい方に変わったと言われるが、それが本当であれば、ただ彼女たちの真似をしているにすぎない。



Thanks Givingのお休みでChicagolに行く途中のスターバックスにて。(写真中央下、筆者。左上タイ政府派遣のPae Radapat、右、ルームメイトで台湾人のRebecca Yu。2009年5月現在2人ともUniversity of Michigan, School of Informationの博士課程在学中)

さらに、John Swales博士率いるミシガン大学 ELI(English Language Institution)、特にChris Feak先生の強力な英語指導や、毎日アメリカ人学生と共に授業を受けるという荒治療により、英語があまり喋れなかった私も留学して半年過ぎたころには、憧れのTannenやSchiffrinといった談話分析の研究者のいるGeorgetown Universityで学会発表をすることができた。Georgetownから発表原稿がアクセプトされた旨のメールが来たときの喜びは、今でも忘れない。このミシガンで受けたしごきにより、私は翌年もGeorgetownで発表をし、憧れだった社会言語学者のLabovの基調講演を聞き、同じ時、同じ場所に座っているという感動も味わった。

さらにIGALAで志を同じくする女性研究者とも会うことができ、私はもう研究者としてアマチュアの域は超えたという幸せな実感に浸った。

もし比文を受験しなかったら、そして松村先生に引き受けてもらえなかったら、私がこういった冒険をすることはなかったと思う。もちろん頑張ったのは自分であるが、糸口をくれたのが比文である。

よく博士はコミュニケーション能力がない、つぶしが効かないと世間の人は言う。

しかし、私は5年間の研究や経験を通して、スキーマの異なる、様々な文化背景から来た人の中で、自分のやるべきことをとりあえずやるというコミュニケーション能力は向上したと思う。また、自分のやりたい研究を進め、世界の学会の情報を集め、英語で発表し論文を書くという自律的な研究能力とまたそれを進める忍耐力もついたと思う。

それは日本村で求められるコミュニケーション能力や研究能力とは遠いかもかもしれないが、私はこの5年間を通して「やれるところまではやった」という達成感を得た。

先ほども述べたように、私は現在職探し中である。

しかしそういった達成感から来る「私はどんな困難な状況でも何か自分の道を見つけて、やり遂げることができるのではないか」という自分に対する信頼が、いつかこの現状を打破してくれるのではないかとなんとなく思っている。

そんな目に見えない「実力」や「自信」をつけるために、5年もの時間を投資したのかと賛否両論あるだろう。

しかし、少なくとも私はあのまま一介の日本語教師を続けるより、自分の心になかった5年間の生活であったと思う。また国内で必要とされないのであれば、もっと広い世界、そして地球の果てでやっていけるのではという可能性を手にした。

よく考えるとその可能性こそが比文に入る時に、一番欲しかったものではないかと思う。

可能性は可能性のまま終わるかもしれないし、あるいは現実になってくれるかもしれない。

目下、私の夢はまたいつかのようにPaeやRebeccaと人生の一部を共に過ごし、語りあうことである。夕食を一緒に食べたあとにスターバックスでくつろぎながら、お互いの近況、勉強、仕事、時事問題、共通の知人、恋愛について語り合う。そんな夕べがまた来ることを夢見ている。

## 学位論文を書き終えてーインドネシア・カリマンタンのサンゴ礁を守るためにー

### ハンドコ・アディ・スサント

(地域資料情報講座)

九州大学の比較社会文化学府に入学がゆるされたときは、本当にうれしかったです。修士課程を卒業して国際的な保全協会であるTNC（The Nature Conservation）に就職して以来、ほとんど3年かがりの私の希望でした。そのきっかけは私の上司であるWWFのカリマンタン支部長のマテウス・ハリム博士が、やはり九州大学で学位をとっていることでした。ハリム氏はこの比文の連携講座の米田先生の指導の下、アオウミガメの成長や衛星テレメトリーを用いた生態学的研究で学位をとりました。それで私にも、(財)自然環境研究センターによるJWRC奨学金への応募を勧められました。



調査準備：ハンドコとTNCの友人

私が日本に入国する前に、もちろん私は上司や友達から、日本での勉強や生活について、日本に関する情報を集めてきました。これらすべての情報は日本での生活や研究を始めるにあたって、非常に有益なものでした。特に日本の状況にどう溶け込むかとても役にたったと思います。

私の日本滞在は、新しい場所に住むことは私にとって夢のようなものでした。本当に楽しかったです。福岡は西日本の九州で一番大きな都市です。気候は、日本の他の地域に比べて過ごしやすかったです。この都市は本当にクリーンで、日本人は本当に良い人達で、フレンドリーでおだやかな人たちでした。

私が日本に着いたときには、日本語を全く理解できなかつ

たので、日本での生活を始めるのには不安がありました。IDカードの申請や銀行口座の申請から健康診断や保険のことまで、いつも研究室の友人が手伝ってくれました。

私の研究テーマは「インドネシア・東カリマンタン・ベラウ地域における炭素・窒素安定同位体比を用いた堆積物のサンゴ礁への影響評価」でした。私は、以前住んでいたカリマンタンのベラウ域を調査地域として選びました。ベラウ海洋域は太平洋の“The Coral Triangle”とよばれるサンゴ礁の中央部に位置し、507種におよぶサンゴや、サンゴ礁魚類・無脊椎動物種の多さにおいて地球生物多様性のホットスポットとして重要な地域です。しかし、現在世界各地のサンゴ礁は減少の傾向にあります。その原因としては、有害な漁業活動などの人類活動によるサンゴ礁の破壊のほか、地球規模の気候変動などがあげられています。

私の研究は、サンゴ礁に大きな被害を与えている河川からの堆積物の影響を取り上げました。それには、(1)カリマンタン北部の中央を流れるベラウ川とベラウ干潟の水質調査、(2)陸生有機物の汚染が海洋のどこまで及んでいるかを安定同位体で調べる、(3)サンゴの栄養源として共生する褐虫藻の役割、(4)海水のにごりが褐虫藻の光合成へ与える影響などを調べました。



深度10mまでのサンゴ礁調査

現地調査の費用は(財)自然環境研究センターのJWRC奨学金がインドネシアでの調査費も負担してくれました。お

かげで私は合計4回の分析試料の収集をすることができました。生態学的に私の研究に必要なすべてのシーズンをふくめ、淡水河川域から海洋域までの結果を示すことができました。

調査項目には、物理化学的な水質調査から、生息地内の代表的な生物の炭素・窒素安定同位体を測定しました。さらに私はこれらの研究成果を日本プランクトン・ベントス学会、日本生態学会や九州海洋懇話会（九大の天草実習所が毎年主催）など日本国内ばかりでなく、アメリカでのサンゴ礁国際学会でもその結果を発表することができました。

炭素・窒素安定同位体分析には質量分析機を用います。最初は不安でしたが、サンプル処理から質量分析機の使い方まで、ポストドックの人が丁寧につきそって教えてくれました。おかげで、博士3年のときには、RAとして採用され、私はほとんど質量分析機の保守をまかされました。この経験は、経済的に助かったばかりでなく、私に自信をつけるものでした。

私は2年になったとき、家族（妻と2人の小さい息子）を日本に呼んで一緒に暮らようになりました。経済的に大変だったのですが、とても助かったのは、日本の政府が収入のレベルに応じて人々により安いアパートなどをくじ引きで提供していることです。二月に一度市役所はこのくじ引き制度を実行しています。これらのアパートは通常の値段に比べると実に安く設定されています。日本に滞在する留学生は収入がないので、行政はほとんど75%引きで、居心地の良いアパートをわれわれに提供してくれました。

九州大学は日本ばかりでなく国際的にもよく知られている大学のひとつです。大学の実験設備は完全であり、充実しています。また学生や教授が研究をするサポート体制について大学は十分なサポートをされていて問題がないように思いました。日本政府は本当に教育問題によく配慮しています。伊都の新キャンパスは、高い技術水準をもつ実に驚きのキャンパスです。ただ残念だったのは、私が博士課程修了の時に移転したことでした。新キャンパスにおめでとうと言いたいです。

九州大学は有名な大学であるばかりでなく、世界中の多くの出版社や大学とリンクしていて、up-to-dateな研究結果を検索して得ることができる、学生や教員と他大学や出版社との間に共有システムを構築しているのには驚きました。その結果、学生は世界中の国際的な雑誌類に簡単にアクセスしているのです。

学位論文の執筆は、当初考えていたより、ずっと難しいものでした。私の研究期間では、小池教授・米田先生・菰田先生の3人が指導にあたってくれました。小池先生は世

話人教員で、私の研究の展望全体についてよく理解し、強い決断力と指導力をもって指導しました。彼女はまた私が日本にくる機会を作ってくれた人で、日本での生活のよきガイドでした。私の最初の指導教員として小池先生は私の研究全体のいろいろな局面や課題をアドバイスしてくれ、日本滞在中の様々な問題について理解してくれ、日本にきた最初の時以来、私をリードしてくれました。

JWRCはまた2人の客員教授を私の指導教員として提供してくれました。つまり、かれらは本当に専門的な指導をしてくれました。米田先生は、私の研究のいろいろな側面や経済的な問題に忍耐深く耳を傾けてくれた。彼からの一般的な指導は私が論理的にまたより深く考えるように力づけてくれました。菰田先生は私の研究を客観的に評価してくれました。また、かれは私の学位論文を優秀な英語力で修正してくれました。この3人の先生によって、私がこの3年間に十分成長してきたのは、かれらのおかげです。

実際私は指導教官だったこの3人に指導を受けたことは、本当に幸運なことで、よりよい研究ができたと思っています。このことは、私が学位論文を書くとき、時々プレッシャーを感じることもありました。私はたくさんの論文修正を指摘され、学位論文が良いアドバイスをえて、だんだん良くなっていくことを感じました。日本の大学の学生が指導教官として1人以上の教員が指導していることはめずらしいことです。学位の結果を最後に公開審査として発表している時、私は本当に自信をもつことができました。

私の研究室の友達は本当に親切で、特に最初の年には大変助かりました。私が日本語を理解できなかったのも、日本での生活や研究に関する問題の多くは彼らによって助けられました。皆さんどうもありがとうございました。



現地での楽しい夕食

## 平成20年度比文学位記授与式挨拶

田中 良之

(比較社会文化学府長)

平成20年度九州大学大学院比較社会文化学府の学位授与式に臨み、学府長としてご挨拶申し上げます。

本年度は、修士課程が日本社会文化専攻37名、国際社会文化専攻13名の計50名。博士の学士取得者は、課程博士が比較社会文化10名、理学1名、論文博士が比較社会文化1名、理学1名の計13名。以上合わせて修士50名、博士13名の学位取得者を送ることになりました。まずは、このよき日を迎えられた皆さんに、お祝いを申し上げたいと思います。おめでとうございます。

修士課程の方は自己の専門分野における様々な知識と方法を習得され、あるいは異分野との融合を成し遂げて独自の領域へと向かい、修士論文を執筆し提出されたと思います。また、博士となられた方々は、学界で業績を積み、独立した研究者としての自立の証を博士論文として提出されたことと思います。ステージは違えど、皆さんは私たち研究者の仲間としてこの場におられるわけです。修了後の進路については、博士課程に進学される方、研究教育職に就かれる方、あるいは企業や官庁へと就職される方、様々ではありますが、この比較社会文化学府で身につけられた学識とスキル、そして人間として社会人としての見識を遺憾なく発揮され、それぞれの分野で活躍されることを希望します。

とくに、この10年ほどの間、改革の名の下に日本の社会が効率化を最優先していった結果、きわめていびつなシステムを作り上げ、そこに百年に一度という言葉で表現されるほどの不況が追い打ちをかけている昨今であるからこそ、この比文で学ばれた皆さんの力が発揮されることと信じております。

さて、本年度の終了式は例年と異なることは皆さんご承知のことと思います。すなわち、今回が六本松キャンパスでの最後の終了式となるわけです。それゆえか、本来入学式の頃に咲くべき六本松の桜が満開となっております。

ご承知のように、本学府は平成6年に学際性・国際性・総合性をキーワードとする比較社会文化研究科として発足しました。学部をもたない独立大学院です。つまり、比文はこの六本松キャンパスで生まれ、それまであった教養部の施設を利用しながら教育研究を行ってきました。スペースは狭隘ですし、このキャンパスの中でも施設は分散して

いました。例えば、私の専門である古人骨研究は亦楽齋、すなわち旧制福岡高校時代からある木造の職員集会所で行ってきました。このような大学院の施設としては不十分としか言いようのない中で、これまで教育研究を行ってきました。その結果として、こんにち多くの先輩方が学界および社会で活躍しているわけです。その意味では、不十分ではあるものの、それを乗り越えながら「比文」の教育研究空間を構築し、機能させてきたのです。本当に15年間よく耐え、頑張ってきたと思います。本日修了される皆さんは、ある意味その総決算ともいえるべき存在なわけです。

皆さんは修了と同時に、自らが学んだ空間を失うことにもなります。それ自体はとても残念なことです。しかし、比文が消滅するわけではないことはもちろんのことです。修士課程を終えて博士課程に進まれる22名をはじめ、在学生やこれから入学する新入生は、これからも伊都キャンパスの比文で教育研究を継続し、発展させていくこととなります。皆さんが拠り所とし、帰ってくる場所はなくなったわけではなく、伊都にあるのです。

新キャンパスでの生活がバラ色というわけではありません。研究教育においては格段に環境はよくなるものの、やはり通学や周辺環境に不備があることは否めないのです。

皆さん方には、比文六本松時代の先輩として、各界で活躍されることはもちろんのこと、伊都における比文の発展を見守っていただき、かつ支援していただきたいと願って、六本松キャンパスでの最後の修了式のご挨拶とさせていただきます。

平成21年3月24日



学位記授与式後の記念撮影

平成19年度博士論文(課程博士) 題目一覧

番 号	博士の専門分野の名称	(ふりがな)氏 名	専 攻	博 士 論 文 名	授 与 年月日
比文博甲第116号	比較社会文 化	きか た かん じ 治 坂 田 完 治	国際社会文化	一党統治と人権 ー改革・開放期の中国ー	平成19年 6月15日
比文博甲第117号	理 学	おか ぎき けん じ 治 岡 崎 健 治	日本社会文化	古代人の成長パターンに関する形態学的研究	平成19年 7月20日
比文博甲第118号	理 学	まん ぶく まい み 美 萬 福 真 美	国際社会文化	Paleoclimatic and paleoenvironmental changes in the Central Nepal Himalayas during the last 600 kyr, reconstructed by organic geochemical study on the Paleo-Kathmandu Lake sediments (古カトマンズ湖堆積物の有機分析により復元された中央ネパールヒマラヤの過去60万年の古気候・古環境変動)	平成19年 10月31日
比文博甲第119号	比較社会文 化	か とう り え 恵 加 藤 理 恵	日本社会文化	「ところ構文」に関する意味論的・語用論的研究	平成19年 12月21日
比文博甲第120号	理 学	おお しま やす ひろ 宏 大 島 康 宏	日本社会文化	The systematics of the tribe Limenitidini (Lepidoptera, Nymphalidae) based on morphology イチモンジチョウ族(鱗翅目, タテハチョウ科)における形態に基づいた分類体系	平成20年 1月28日
比文博甲第121号	比較社会文 化	かわ だ かず こ 子 河 田 和 子	日本社会文化	戦時下の文学と〈日本的なもの〉 ー横光利一と保田與重郎ー	平成20年 2月15日
比文博甲第122号	比較社会文 化	え ぐち ふ ゆ こ 子 江 口 布 由 子	国際社会文化	オーストリアにおける児童福祉の形成(1880~1918年) ーシュタイアーマルクの事例を中心にー	平成20年 2月15日
比文博甲第123号	比較社会文 化	り 季 けい しゅう 松 李 勁 松	国際社会文化	中国朝鮮族の移動と朝鮮族コミュニティの形成に関する研究	平成20年 2月29日
比文博甲第124号	比較社会文 化	あ り 莉 た 塔 阿 莉 塔	日本社会文化	「蒙疆」研究 ー歴史、紀行、文学ー	平成20年 2月29日
比文博甲第125号	比較社会文 化	きょく し しょう 強 曲 志 強	国際社会文化	日中日常あいさつ表現対照研究 ー文化的言語的視点からー	平成20年 2月29日
比文博甲第126号	比較社会文 化	つ だ あき こ 子 津 田 晶 子	国際社会文化	大学英語教育のニーズ分析とプログラム評価 ー「接続的」「継続的」「国際的」なカリキュラム開発の視点からー	平成20年 2月29日
比文博甲第127号	比較社会文 化	さ とう ま き 紀 佐 藤 真 紀	国際社会文化	ジゼル・ブルレにおける音楽的時間 ー永遠と持続の弁証法ー	平成20年 3月25日
比文博甲第128号	比較社会文 化	くわ はた よういちろう 一郎 桑 畑 洋 一 郎	日本社会文化	<ハンセン病療養所なる施設>の形成と変容 ー沖縄愛楽園における<ハンセン病をめぐる制度>と<療養所生活>を通してー	平成20年 3月25日
比文博甲第129号	理 学	ラーマンムハマッド アビア	国際社会文化	Potential Application of Tree Leaves for Crop Production and Soil Environment Charge during the Dry Season of Bangladesh (バングラデシュの乾季作物生産と土壌保全のための樹木葉の利用に関する研究)	平成20年 3月25日

○○○ 大学院データブック

比文博甲 第130号	理学	うま だ ひで のり 馬 田 英 典	日本社会 文化	Morphometrical study of the tribe Papilionini, especially on the genus Chilasa and the related taxa (Lepidoptera, Papilionidae) (マネシアゲハ属 Chilasa およびその近縁分類群を中心としたアゲハチョウ族 Papilionini (鱗翅目, アゲハチョウ科) の形態測定学的研究)	平成20年 3月25日
比文博甲 第131号	理学	マハディメナク バルピンモハメド ダウッド	国際社会 文化	Studies on Saproxyllic Arthropod Communities along Altitudinal Gradients on Mount Kinabaru of Sabah, Malaysia (マレーシア、サバ州、キナバル山塊における腐朽材を利用する節足動物群集の標高に伴う変化に関する研究)	平成20年 3月25日
比文博甲 第132号	比較社会 文化	おお しま あき ひで 大 島 明 秀	国際社会 文化	ケンペル原著、志筑忠雄訳『鎖国論』写本の書誌学的研究とその受容 —近世および近代日本における「鎖国」観の形成史—	平成20年 3月25日
比文博甲 第133号	比較社会 文化	やま じ な お こ 山 路 奈保子	日本社会 文化	文学作品を利用した異文化理解教育 —「ほめ」とその周辺の言語行動を中心に—	平成20年 3月26日

平成19年度博士論文(論文博士) 題目一覧

番 号	博士の専門 分野の名称	(ふりがな) 氏 名	博 士 論 文 名	授 与 年月日
比文博乙 第16号	比較社会 文化	ふじ おか けん たろう 藤 岡 健太郎	戦間期日本の<国際主義>と<地域主義>	平成19年 6月15日
比文博乙 第17号	比較社会 文化	ふる むら ゆ み こ 古 村 由美子	成人バイリンガルの「断り」場面における対人葛藤対処方法に関する研究 —英語母語話者は日本人英語話者の対処方法をどう評価するのか—	平成19年 9月25日
比文博乙 第18号	比較社会 文化	あいだ 間 ふ さ 子 間 ふさ子	中国南方話劇運動研究 —方言話劇の歩んだ道—	平成19年 12月21日
比文博乙 第19号	比較社会 文化	なか お ゆ か り 中 尾 友香梨	江戸時代の明・清楽研究 —江戸文人と異文化受容—	平成20年 1月31日

平成19年度修士論文題目一覧

日本社会文化専攻

学位の種類	(フリガナ) 氏名	修士論文題目
修士 (比較社会文化)	アズマ 東 知 史	ザ・ブルー・ハーブと聴衆の<労働観・生き方> — 1998年以降のヒップホップ観をめぐって—
修士 (比較社会文化)	アヲ 天 野 愛 子	森鷗外「蛇」論
修士 (比較社会文化)	シシ 石 田 智 子	弥生土器からみた地域性—北部九州弥生時代中期を中心に—
修士 (比較社会文化)	イヅ 井 上 絵 里	遠藤周作における歴史小説創作の意味 —『王国への道 山田長政』から—
修士 (理学)	イワ 岩 下 芙 紗	頭蓋形態小変異の出現頻度に基づく安陽殷墟王陵区出土人骨の人類学的研究
修士 (比較社会文化)	ウス 臼 杵 大 介	「和協」の変容 — 第一次広田外交の再検討—
修士 (比較社会文化)	オウ 王 涵	日中両言語における新語の諸相
修士 (比較社会文化)	オウ 王 暁 燕	日本語の受身表現と中国語の被動表現について — 間接受身を中心に—
修士 (比較社会文化)	オウ 王 龍	若い男性の話し方の特徴 —九州大学農学部の一研究室の会話例を中心に—
修士 (比較社会文化)	カワ 河 浜 秀 明	マンガにおける作者表象の系譜
修士 (比較社会文化)	キノ 木 下 直 子	日本における<性暴力>概念の誕生 —ラディカル・フェミニズムとウーマン・リブをめぐって—
修士 (比較社会文化)	ケン 巖 珪	横光利—「上海」と茅盾「子夜」の対比研究
修士 (比較社会文化)	コ 古 賀 慎 也	近世「日本人」における言説としての被我認識
修士 (比較社会文化)	サ 佐 藤 来 未	近世中後期における柳河藩奥方組織の研究
修士 (比較社会文化)	シヤ 謝 佩 津	日本語学習における真偽判断のモダリティの習得について — 中国語母語話者を対象として—
修士 (比較社会文化)	シヨウ 蔣 剣 波	「～テクル」「～テイク」と「起来」「下来」「下去」の対照研究 — 本動詞からアスペクト表現への意味拡張・文法化を中心に—
修士 (比較社会文化)	タケ 武 村 美 和	「～てくれる」に先行する動詞の習得について — 中国語母語話者に焦点をあてて—
修士 (比較社会文化)	チエ 崔 維 卿	日・韓談話スタイルにおける「あいづち」の基礎的研究
修士 (比較社会文化)	チヤ 茶 園 梨 加	「サークル村」における炭鉱労働者作家の研究
修士 (比較社会文化)	チョウ 張 正 華	日本語の「シテイル」とそれに対応する中国語の形式に関する基礎的研究
修士 (比較社会文化)	ナカ 中 島 一 登	椎名麟三の思想 — 道化師の修練としての「ユーモア」—
修士 (比較社会文化)	ノ 野 中 亮 介	高浜虚子『俳諧師』『朝鮮』における花鳥諷詠
修士 (理学)	ハバ 浜 端 朋 子	アオウミガメ Chelonia mydas のDNA解析
修士 (比較社会文化)	ヒサ 久 志 唯	日本語母語話者の会話における笑いの機能について — 大学生の二者会話に着目して—



○○○ 大学院データブック

修士 (比較社会文化)	フン カ 文 華	高等学校における経済教育の日中比較 — 公民的資質の養成を中心に —
修士 (比較社会文化)	マツ イ アヤ ユ 松 井 綾 子	福岡市における保育サービス需給の地域的差異に関する研究
修士 (比較社会文化)	マツ モト ケイ タ 松 本 圭 太	中央ユーラシア東端における青銅器時代後期の様相
修士 (比較社会文化)	マツ モト ユキ ユ 松 本 有 希 子	福岡県における託児所付き日本語教室が担う新たな役割 — 非日本語母語話者を親に持つ乳幼児に支援できること —
修士 (比較社会文化)	モリ トモ タカ 守 友 隆	近世の宿と湊 — 筑前国遠賀郡黒崎宿を中心に —
修士 (比較社会文化)	リ 李 キ 職 季 曦 曦	実際の会話場面における『から』と『ので』の使い分けに関する研究
修士 (比較社会文化)	リ 呂 芳 呂 芳	始動局面を表す動詞の形式の基礎研究 — 「～かける」「～はじめる」「～だす」について —
修士 (比較社会文化)	ワタ オベ シン ヒサ 渡 部 芳 久	北部九州弥生時代における木工活動の変遷とその背景

国際社会文化専攻

学位の種類	(フリガナ) 氏 名	修 士 論 文 題 目
修士 (比較社会文化)	アオ キ エグレ 青 木 エグレ	長崎における遣日全権大使 N.P. レザーノフの交渉とその影響について — 帝政ロシアの東方政策と世界周航を背景に —
修士 (比較社会文化)	カ 何 リン ナ 何 琳 娜	現代日本人気マンガに描かれた外国人ステレオタイプ — 送り手研究を中心に —
修士 (比較社会文化)	カザ マチ アキ 風 間 千 秋	韓国における「日本の歴史教科書問題」の形成
修士 (比較社会文化)	キム ミ ラン 金 美 瀾	動詞の意味拡張— 日本語の「おく」と韓国語の「두다」「놓다」 —
修士 (比較社会文化)	コ 呉 キン イ 呉 金 英	韓国における日韓国際結婚について — 文化的葛藤および適応を中心に —
修士 (理 学)	コ マツ フミ キ 小 松 史 樹	氷期サイクル年代による過去三百万年間の地球磁場の研究
修士 (理 学)	ミン ドウ マサ ノリ 近 藤 雅 典	Classification of the genus Phorticella (Diptera, Drosophilidae)
修士 (比較社会文化)	サカ グチ シン イチ 坂 口 慎 一	権力論 — 事例研究のための理論的予備考察 —
修士 (比較社会文化)	ショウ 郡 キョウ リョウ 郡 旭 亮	A Survey on Pragmatic Failure in English as a Foreign Language: A Case study on Interlanguage Pragmatic Competence of Japanese University Students in EFL
修士 (理 学)	ミナミ ヒロ キ 南 浩 紀	深海底コアを用いたインド洋モンスーン地域の第四紀大気ダイナミクスの復元 — 石灰質ナンノ化石量と窒素・炭素同位体比の変動解析からのアプローチ —
修士 (比較社会文化)	ヤマ ト ユミ ユ 大 和 裕 美 子	山口県民の「戦犯」観と岸信介の政界復帰
修士 (比較社会文化)	リョウ 劉 ア ヘイ 劉 晏 宏	中国の啓蒙思想家 — 梁啓超の「自由」「民権」思想の受容状況について —

平成20年度博士論文(課程博士) 題目一覧

学位番号	学位の種類	(フリガナ)氏名	専攻名	博士論文名	授与年月日
比文博甲第134号	博士(比較社会文化)	金成 妍	日本社会文化	越境する文学 —朝鮮児童文学の生成と日本児童文学者による口演童話活動—	平成20年6月20日
比文博甲第135号	博士(比較社会文化)	金 春 暲	日本社会文化	韓国人日本語学習者に対するアカデミックライティングの指導法開発に向けた基礎研究 —書き手と読み手の視点から—	平成20年7月28日
比文博甲第136号	博士(比較社会文化)	クモハマドナビル	日本社会文化	日本人とマレーシア人の「謝罪」に関する対照研究	平成20年9月22日
比文博甲第137号	博士(比較社会文化)	佐々木 拓 雄	国際社会文化	イスラーム主義と対峙する民衆 —スハルト後インドネシアの政治社会変容—	平成20年11月25日
比文博甲第138号	博士(比較社会文化)	黄 士 瑩	日本社会文化	意見不一致の場面における台湾人と日本人の対処に関する対照研究	平成21年2月20日
比文博甲第139号	博士(比較社会文化)	土井 徹 平	日本社会文化	近代の鉱山における労働と秩序 —1880年代から1910年代における足尾銅山の労使関係について—	平成21年2月28日
比文博甲第140号	博士(比較社会文化)	金 斑 実	日本社会文化	近代間島移住朝鮮民族に対する日本語教育の基礎的研究	平成21年2月28日
比文博甲第141号	博士(比較社会文化)	徳 留 大 輔	日本社会文化	中国初期王朝形成過程の考古学的研究	平成21年2月28日
比文博甲第142号	博士(比較社会文化)	邱 鴻 霖	日本社会文化	人骨考古学による台湾鉄器時代社会構造の研究	平成21年3月24日
比文博甲第143号	博士(比較社会文化)	阿 野 薫 菊	日本社会文化	話者交替と話題転換に関する言語表現 —場面・性別・メディアが言語表現に与える影響—	平成21年3月24日
比文博甲第144号	博士(理学)	ハンドコ アディ スサント	日本社会文化	Assessment of the Sedimentation Effects on the Coral Reefs using Stable Carbon and Nitrogen Isotopes in Be- rau, East Kalimantan, Indonesia	平成21年3月24日

平成20年度博士論文(論文博士) 題目一覧

学位番号	学位の種類	(フリガナ)氏名	博士論文名	授与年月日
比文博乙第20号	博士(理学)	シ 重 永 英 年	スギ人工林蒸散量に及ぼす温暖化影響の広域評価と脆弱な植栽地域の予測	平成21年2月20日
比文博乙第21号	博士(比較社会文化)	菅 田 光 史	戦時期日本の政治過程 —明治憲法の運用をめぐる政党の模索—	平成21年2月28日

平成20年度修士論文題目一覧

日本社会文化専攻

学位の種類	(フリガナ) 氏名	修 士 論 文 題 目
修士 (比較社会文化)	アオキキサチ ユ子	日本語教師の専門性とは何か － 1945年以降の官公庁による「専門性」確立へ向けた施策を中心に－
修士 (比較社会文化)	アンギン キ姫	「提案をする行為」の日中対照研究 － 実際の相談場面における提案を通して－
修士 (比較社会文化)	イシイ井 ヨウ ユ子	博多湾沿岸地域における古墳時代の集落動態
修士 (理 学)	イシガキ垣 マサル 勝	越境する巨大科学 － 熱核融合国際共同開発計画までの道程－
修士 (比較社会文化)	イシダ田 ヒデアキ 明	来日直後の日本語学習者における音声の発達 － 中国語話者の場合－
修士 (比較社会文化)	イナダ田 ダイキ 貴	『豊饒の海』というテキスト － 綾倉聡子を視座とした「語られないもの」の機能－
修士 (比較社会文化)	エンシ 振 リ	日本におけるシートベルト着用規制と部品メーカー － 1960年代後半～1970年代前半を中心に－
修士 (比較社会文化)	オノノ野 マサト 人	北部九州における弥生時代開始期の水田稲作農耕集落の成立と展開 － 住居形態の変遷を中心として－
修士 (比較社会文化)	カネコ ユリヲ 龍 司	戦時下日本における政治権力と歌
修士 (比較社会文化)	カミヤ谷 ミワ 和	日本における大唐米の受容と推移について
修士 (比較社会文化)	キムウービン	近世日朝関係における朝鮮語通詞の位置と役割
修士 (比較社会文化)	キンミ 馨	会話における言いさし表現について － 日・中・韓対照研究－
修士 (比較社会文化)	クヌノセ 瀬 ケイ 太	中世怡土庄における土地開発と村落景観
修士 (理 学)	クニトウ 藤 トシヒロ 洋	キチョウ <i>Eurema hecabe</i> (広義) の分類と生物地理に関する研究 － 特に紫外線反射パターンを中心に－
修士 (比較社会文化)	コガガ 賀 タツマ 磨	女性おたくのコミュニケーションと同人誌の表現から見る 趣味による排除について
修士 (比較社会文化)	シウツ 祝 リ	戦前中国東北地方における日本語教育 － 中国人日本語教師の日本語能力と教授法を中心に－
修士 (比較社会文化)	シンシ 申 ミ 仙	朝鮮における『金色夜叉』 － 翻案「長恨夢」にみる小説と演劇との交渉－
修士 (比較社会文化)	トリラッサクルチャイス イリポーン	「藪の中」と「Hed Kerd Khaang Tha Non」(沿道での事件)の対比的 研究
修士 (比較社会文化)	ソウジ 藏 ヒ 薇	日中化粧品広告ディスコースの対照研究 － 発話の内容、話者態度評価を中心に－
修士 (比較社会文化)	ソンシ 孫 ヒ 穎	中国の自動車産業へのトヨタの進出 － 生産方式の浸透を中心に－
修士 (比較社会文化)	タテバナ ナオミ 緒 美	カラススクール修生生のワーク・ライフ・バランスの可能性について － 自己雇用という就労形態を例にして
修士 (比較社会文化)	タダカ 中 リツ ユ子	村上春樹における倫理をめぐって － 自己受容と他者受容という視点から－
修士 (理 学)	チョウヒョウ 炯 ジュ 柱	クロツラヘラサギ ( <i>Platalea minor</i> ) のミトコンドリア DNA 解析
修士 (比較社会文化)	チン 陳 イ 吟	日本語の終助詞に見られる男女差 － 若者の自然会話を中心に－

修士 (比較社会文化)	鄭	キョク玉	シン申	中国語の「V着」形式とそれに対応する日本語の形式について	
修士 (比較社会文化)	トウ堂	モト本	サチ子	ベトナムにおける日本語普及の特徴 — 日仏共同支配期から現代まで —	
修士 (比較社会文化)	シ西	エ江	サチ子	土器地域性とその動態 — 弥生時代中・後期における東部瀬戸内地域を対象として —	
修士 (比較社会文化)	シ西	オ尾	ノリ典	「陸海軍統合」研究と日本海軍—XY研究にみる政策決定過程—	
修士 (比較社会文化)	ノ野	グチ口	アヤ綾	国立国会図書館所蔵本 変態百人一首シリーズについて	
修士 (比較社会文化)	フジ藤	モト本	アキ晃	夏目漱石におけるイプセンの影響をめぐって — 『野分』『三四郎』を中心に —	
修士 (比較社会文化)	フジ藤	ヤマ山	サト智	中国語母語話者による日本語の語彙知識習得と文章理解 — 漢字語彙を中心として —	
修士 (比較社会文化)	フク包		ウ宇	清岡卓行の大連表象 — 「アカシヤの大連」を中心に —	
修士 (比較社会文化)	ミズ水	ノ野	タカ崇	山崎正和の「近代」論	
修士 (比較社会文化)	モン門		ケン傑	戦時期と2000年以降の中国華北地方における日本語学習者について — 戦時期の日本語学習者の学習動機を中心として —	
修士 (比較社会文化)	ヤマ山	シタ下	ノリ徳	「感情形容詞」とは何か — 人称制限とその諸要因 —	
修士 (比較社会文化)	リ李		コウ紅	キョク玉	人称代名詞の省略における日中朝対照
修士 (比較社会文化)	リュウ劉		ジュ樹	イ偉	中国 ソフト・エネルギー・パス

国際社会文化専攻

学位の種類	(フリガナ) 氏名	修士論文題目
修士 (比較社会文化)	アスガイ 飛鳥井 イク 郁 エ枝	留学生と地域住民の交流による多文化相互理解 — 六本松学生交流会館の取組みを中心に —
修士 (比較社会文化)	イシ 生 田 アツ篤	「アイデンティティの政治学」への批判と例外としてのパレスチナ解放運動—サイードの『パレスチナ問題』を中心に—
修士 (理学)	イシ 石 井 アカリ明	植林木に及ぼす雑草のアレロパシーに関する研究
修士 (比較社会文化)	オオ 太 田 マリ 茉莉 ユ子	Impediments to Progress in Peace Implementation in the Context of Conflict Resolution: A Study of the Credibility Commitment to Peace Implementation in the Post - Agreement Phase
修士 (比較社会文化)	キン 金 セキ 石 カン 煥	日中時間意識のずれによる相互イメージの交錯
修士 (理学)	コ 小 シマ 島 マコト 淳	カリブ海バハマ沖の更新世堆積物の水銀量と気候変動の関係
修士 (比較社会文化)	シロ 首 トウ 藤 マイ 舞	観光における福岡市と釜山広域市の戦略イメージ — 「TWIN」都市から「共同体」に向けて —
修士 (比較社会文化)	ジョ 徐 アン 安	ヘルダーにおける民族と言語の問題 — 『民謡集』の序論を中心として —
修士 (比較社会文化)	チョウ 張 コウ 宏	沈從文と同時代人 — その文学創作における転換点について —
修士 (比較社会文化)	テイ 鄭 キチ 吉 ナン 楠	魯迅の日本留学期におけるロシア文学受容の研究

○○○ 大学院データブック

修士 (比較社会文化)	林	ファン 環	奈	日本における民族学校の朝鮮語教育 ー総聯系「朝鮮学校」の初級部国語教科書を中心にー		
修士 (比較社会文化)	橋	モト 本	ユ 裕	ミ 美	ヨ 子	九州大学工学部・大学院工学府英語ニーズ分析 ー工学部4年生および修士1, 2年生の聞き取り調査からー
修士 (比較社会文化)	濱	サキ 崎	セイ 誠	イチ		DIAMOND STUDY (ダイヤモンドの価値 宝石の価値)
修士 (比較社会文化)	村	カミ 上	イク 育	ヨ	代	Effects of Shadowing on Listening and Speaking Skills of Japanese EFL Learners: A Case Study of Japanese University and College Students



# 九州大学



伊都キャンパス  
センターゾーンと  
比文・言文研究教育棟

## 編集後記

おわりそうにもなかった移転作業。むりやりけりをつけて終わりにして、いつとはなく新体制に移行しました。はやくも前学期半ばが過ぎようとしています。キャンパス移転で広報関係の印刷物はすべてが新規に作り直しです。広報・情報化委員会はてんでこ舞い。クロスオーバーに新しい情報を取り込みたい。新しい研究施設の案内ももりこんでみよう。新環境での新しい気力活力。行間に読み取っていただけることと思います。本号は担当になっていただいた松井先生のご尽力で刊行にこぎ着けられました。あつくお礼申しあげます(服部英雄)。

伊都キャンパスに移って4か月が経ち、ようやく通勤パターン(通勤手段、時間帯)が固まってきました。通勤時間がわずか10分で済んだ六本松の便利さを思い出しながらも、新しい生活に徐々に馴染んできたようです。特に、今回の特集記事の準備にかかわって、伊都キャンパスのセンターゾーンにいろいろな工夫や仕掛けが施されていることを知り、愛着もわいてきました。教育・研究にますます精進できそうです。改めて、原稿をご執筆頂いた方々に感謝申し上げます(松井康浩)。

### SCSのロゴの説明



SCS(エス・シー・エス)は、九州大学大学院比較社会文化学府の英文名称 Graduate School of Social and Cultural Studies の略称です。ロゴはSCSを図案化したものです。考案者は「二羽の鴨に見える」と主張していますが、「一羽にししか見えない」と言う人もいます。しかし家鴨ではないという点では、私たちの意見は一致しています。裏庭の囲いのなかで餌をもらって外の世界を知らずにいる家鴨ではなく、越境する渡り鳥である鴨こそが、私たちのめざす新しい学府にふさわしいと考えているからです。

広報情報化委員会 クロスオーバー編集担当：服部英雄、松井康浩



GRADUATE SCHOOL OF  
SOCIAL AND CULTURAL STUDIES

発行者 九州大学大学院比較社会文化学府  
発行年月 2009年 7月

〒819-0395 福岡市西区元岡744

TEL : 092(802)5786・5787

FAX : 092(802)5785

ホームページ : <http://scs.kyushu-u.ac.jp/index-j.html>